



## 特集：ボーダースタディーズ・セミナー2012

GCOE-SRC 特別セミナー 共催 サハリン樺太史研究会

**境を越える義経ジンギスカン伝説  
大陸雄飛論から冒険小説まで**

講師 **橋本順光**  
(大阪大学)

源義経と成吉思汗 加藤武高著  
源義経と成吉思汗 加藤武高著  
源義経と成吉思汗 加藤武高著

城王の底地  
著 山本太郎

**3月9日(水) 16:30~18:00**

北海道大学スラブ研究センター  
4階大会議室(403号室)

連絡先: gkoshino@slav.hokudai.ac.jp  
011-706-4809(越野)

Slavic Research Center

グローバルCOEプログラム  
境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界

境を越える義経ジンギスカン伝説 大陸雄飛論から冒険小説まで	2 頁
橋本順光(大阪大学)	
北欧型新自由主義の到来	18 頁
橋本努 (北海道大学)	



## 境界を越える義経ジンギスカン伝説 大陸雄飛論から冒険小説まで

日時 2011年3月9日(水)、16:30-18:00、北大スラブ研究センター4階大会議室

報告者 橋本順光(大阪大学)

(司会、越野) 本日のグローバル COE、スラブ研究センターのセミナーを始めさせていただきたいと思います。本日は講師に大阪大学の橋本順光先生に来ていただきました。橋本先生のご専門は英文学ですが、大変広い関心・研究対象をお持ちです。先生は「黄禍論」、黄色人種が世界を脅かすという言説研究で数々の論文を書いており、またスラブ研究センターと関係あるものとしては、日露戦争の研究プロジェクトの中でその黄禍論に関係した論文を書いておられます。スラブ研究センターのディビッド・ウルフ教授編集の英文論文集の中にも橋本先生の英文論文が載っております。

今回の話の意図としては、おそらく黄禍論の研究からジンギスカンのイメージ、そして義経ジンギスカン伝説といったつながりについての研究の一つであると思います。グローバル COE は境界ということテーマにしておりますので、この義経ジンギスカン伝説といったものが、さまざまな境界を越えてどのように伝播していったか、また北海道、アイヌという大きいテーマと今日のお話とがかかわってくると思います。

(橋本) ご紹介、ありがとうございます。橋本順光と申します。今日はこのように場にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。私、いつも紹介されるとき、何をやっているのか非常に困るとよく言われますが、基本は比較文学と申しますか、イギリスの文学ですとか、文化の中でのオリエンタリズムとか、中国イメージですとか、日本イメージをやっております。

でもそれをやっておりますと、ただ一方向だけやっているとあまりにもつまらないので、日本側がどのようなことをして、それに対してイギリス側がどのようにレスポンス・誤解をしたか、そうした隙間のようなことを研究しています。比較文学というものの自体が非常に隙間産業みたいなところがあり、その典型的なことをやっているというわけです。

この義経ジンギスカン伝説についてざっとお話ししたいと思います。義経ジンギスカン伝説ですが、源義経を音読みすると「ゲンギケイ」となり、これが「ジンギスカン」とよく似ているということで、ジンギスカンは実は義経であるという説があります。非常にもう荒唐無稽というか、こじつけでしかないですが、この説が流行した過程というのが非常に面白くて、本腰を入れて調べるようになった次第です。

そのきっかけが、末松謙澄の『The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan』です。1879年にロンドンで出版されており、そこそこ話題になりました。これの翻訳が1885年に『義経再興記』として日本で出たのですが、著者が末松とは一言も書かずに、あたかもあるイギリス人かアメリカ人が書いたものを訳した、という体裁で翻訳が出ました。これが非常によく売れました。これが1つの義経ジンギスカン伝説の日本における礎になりました。

それがまたさらに有名になりますのは、小谷部全一郎の『成吉思汗ハ源義経也』という、1924年に出た本で、これが2番目の大ベストセラーでした。3番目が高木彬光の『成吉思汗の秘密』で、調査をしないで推理をしていくという歴史推理小説の形で、ほぼ同じような内容が載っております。



様々な人が、ジンギスカン義経伝説というのはどのようにしてでき、トンデモ本のようなもので広まっていったかということの研究してきましたが、残念ながらイギリスのオカルティズムや、海外の事例との比較考証ですとか、大衆文学と非常に影響しあいながら広まっていったとかいった観点が欠けている。

その中で、いわゆるアカデミズムにおいても非常に優れた研究が、岩崎克己編『義経入夷渡満説書誌』です。ただ、希覯本で古書価ですと、10万円から20万円ぐらいする非常に高価な本です。私家版です。岩崎克己は蘭学研究で非常に有名で、東洋文庫に前野蘭化とか書いており、非常に外国語に堪能で、かつ江戸時代、明治時代の文献をよく押さえている。いまだこれを超えるような義経ジンギスカン伝説本はありません。書史といっても、ただ書名が並んでいるだけではなくて、その書誌の問題点ですとか、概要、引用が全部含まれている。これをざっと読むだけで、どのようにして義経ジンギスカン伝説が広まっていったとか、すぐ分かります。驚くべきことに1943年という、この義経ジンギスカン伝説が最も政治的に利用された年に、私家版で出ています。非常によくできている本で、ほとんどの先行研究の種本です。その典型が、森村宗冬さんの『義経伝説と日本人』（平凡社新書）です。非常によく書けていますが、ほぼ岩崎克己さんのものを抜き書きしただけです。

私がいろいろ見た中で、この手の本として非常によくご自身で調べて書かれているものとして、北海道新聞で長く記者をされた本多貢さんの『なぜ義経がジンギスカンになるのか』（北海道教育社）があります。北海道での現地の調査や、どのように北海道でこうした義経北行伝説（義経が北海道にやってきたという伝説）が観光で利用されたのかについて非常に詳細に、興味深い事実が書かれています。これ以外、先行研究はあまりありません。

私は黄禍論、中国日本脅威論、東洋脅威論みたいなものを研究しています。それは脅威「論」、つまり実際に何か起こったのではなくて、何か起こるかもしれないという言説なのです。ですから、非常に物語との親和性が高く、いろいろな人がさも科学的に言うのですが、根っこはもう完全に物語です。

その物語を最も増幅させる装置みたいなものがこうした伝説、あるいは大衆小説です。私は大衆小説とイメージと、それをもっと広めていく映画ですとか、その隙間やつながりのようなものに関心があるので、ジンギスカン・イメージの関心から、それがどのように日本側で発信されていったのか、そのあたりをちょっと研究してきました。

前置きはこれぐらいにして、まずは義経北行伝説。義経が衣川で死なずにそのまま北に渡ったと。私は歴史家ではありませんので、あくまでそれがどのように利用されたのか、どのようにして伝説が出来上がって広まっていったのかというのを今回考えたいので、あまり歴史的な、いわゆる資料批判のようなことは私にはできません。

まず1番ですがこれは、どれだけそれが広まっていたかという一例です。1880年の記念はがきで、手宮と札幌間に北海道で最初の鉄道が開通しまして、そのときに登場するのが義経号と弁慶号です。言うまでもなく、もうその義経北行伝説を踏まえているという話です。

その義経号が1881年の8月30日の明治天皇の御行幸の際に、お召し列車を牽引する。これもまた絵はがきになっています。ご参考までに、弁慶号、静号、義経号があり、そのまま伝説を踏襲していくようなものでつくられています。これは北海道だけではなく、東京でもそうでした。

一番意外な例としては夏目漱石が挙げられます。漱石は俳句が好きでしたが、1904年9月に漱石邸で高浜虚子、坂本四方太と一緒に連句をしています。それが翌月の『ホトトギス』に掲載されま。



「三吟の屋を撼がす野分かな 萩しどろなる水の隅々 後の月跛の馬にうち乗りて わからぬ歌も節の可笑しき」

ここから次です。

「年々に淋しくなりし熊祭、

よく分からない歌から、それを北海道のアイヌの歌というふうにして持って行って、その後、漱石はこう言います。

「九郎の館は迹ばかりなり」

これは言うまでもなく義経の伝説の九郎ですね。それがもう今は何もない。それを踏まえて虚子が言います。

「静舞今も残れる曲舞に」

静の舞が今は曲舞に残っている、と。四方太が

「黄金作りの太刀佩いて立つ」

と、またこれ、義経の意味で黄金の太刀を佩いて立つという。こんなふうに北海道、熊祭、義経というふうには、簡単につながる連鎖があったわけです。

面白いことに、そのほぼ同じ年に漱石は『吾輩は猫である』を書いていまして、その中で同じ言説が出てきます。

「和唐内は清和源氏さ。義経が蝦夷から満洲へ渡ったときに、うんぬんかんぬん」と散々言っておいて「何を言うのかさっぱり分からない」。本当に分からない、めちゃくちゃな伝説を、そのまま漱石は踏襲しています。

ただ義経北行伝説というのは、もう江戸幕府から始まっている。いわば北海道、特にアイヌの支配のため的一种道具として使われてきました。1番(図)にありますように、アイヌが崇拝するオキクルミというのは蝦夷に渡った義経ではないかという説が出てきます。それが新井白石の『読史余論』ですとか、『蝦夷志』などにもすでにありました。以上は、岩崎先生の研究をそのまま私が述べただけです。

また、奥浄瑠璃の伝播によって習合したものではないかともいわれています。東北地方に義経が逃げた北へ逃れていったという浄瑠璃があります。それにさらに満洲へ渡って清朝の始祖になったという説が、偽書によって流布します。沢田源内という偽書作りの名人がいて、『古今図書集成』の中にあるというふうには言ったんです。小谷部が既に1924年に本を出していて、その次の年に国史講習会が『源義経は成吉思汗にあらず』という本を出して全面的に反論します。

書史的事実は岩崎本が最も詳しいですし、また、海音寺潮五郎が高木彬光に当てつけて、時代小説の立場から、否定するようなことを書いています。今、一番手に入りやすい、全うなアンソロジーとしては、国書刊行会から出ている『書物の王国』という雑誌があり、須永朝彦さんが編集された『義経』があります。江戸時代から伝説が伝説を呼んで、いとも簡単に尾ひれが付いて広がっていく、という見事なアンソロジーです。

次に義経神社ですが、平取のものが最も多いです。これは近藤重蔵が義経像を寄進して、義経像を建立したと。これはもう南下するロシアに対する和人支配を明確にするための里程標として造ったというのですが、これはもう金田一京助からもすでに言われていることです。この辺も私はアイヌ研究者ではなく、北海道の歴史に詳しいわけではありません。ただそのまま先行研究をまとめただけです。

図の3です。岩崎克己がこうした説がどのようにして広まったのか、ということでシーボルトが重要



であることを初めて記しています。岩崎克己が『シーボルトの成吉思汗即義経説とその後世への影響』、とう小説を『中外医事新報』というちょっと見つかりにくい雑誌に載せております。シーボルトも日本でそれが通司から記録されて、それがあつという間に広まったと。そのときのモデレーターだったのが、瀬脇という人で、ウラジオストクへ赴任して、紀行文みたいなものを書きます。

それを末松謙澄が利用します。それが冒頭で申しました『The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan』ですが、ここで、ジンギスはゲンギケイがなまったと主張します。いわば末松謙澄のお手柄です。

末松謙澄は、日露戦争によって日本が今後、国際社会の異物として世界の調和を脅かすのではないかという黄禍論みたいなことが言われていたときに、そんなことはないのだと、主にイギリスとヨーロッパで広報外交に従事した人物です。ケンブリッジ大で法学士の資格を取ったように、非常に多芸多才で英語が堪能で、典型的な優秀な文化官僚です。ジンギスカンの長子フジも富士山からきている。こういう当て字、語呂合わせみたいなことをやります。岩崎克己先生が書いておりますが、なぜか末松はロンドンにいるにもかかわらずシーボルトを利用せず、アメリカのウィリアム・エリオット・グリフィスというお雇い外国人の『The Mikado's Empire』を利用します。

どこから引用したか分からないですが、このグリフィスが、アイヌは義経を崇拝しているというところに注釈をして、中国の書物によると、義経はジンギスカンになったと記されている、と書いたんです。グリフィスが、どこからそれを聞いたのかまったく分からず、ひょっとすると彼の日本語関係のインフォーマント(情報提供者)だった今立吐酔という儒教者から聞いたのかもしれない。

末松がこの義経ジンギスカン説をイギリスと日本に大いに広めます。英語圏にはこの影響が結構大きく、信じ難いことに王立歴史協会でそれが報告されます。フォンデスという日本に来ていたイギリス人のオカルティストが末松をほぼそのままを要約して載ります。

その後、神智学協会という、ブラヴァツキーとオルコットが始めたオカルティックな新仏教という名の下に、スピリチュアリズムを総合した怪しげな宗教がありますが、その神智学協会の機関誌『ルシファー』に、同じくフォンデスが紹介します。意外なところでは岡倉天心こと岡倉覚三も、義経ジンギスカン説について言及しております。おそらく岡倉は末松経由ではなかったでしょうか。

アーサー・モリスンも同様です。推理小説家、日本美術コレクター、また南方熊楠とのロンドンの交流の相手として有名です。この『Morrison: The Strand Magazine』は『ホームズ』も連載された中産階級向けの典型的な挿絵入り雑誌ですが、1912年5月にほぼ同じことを紹介しています。

もう少しアカデミックなところだと、ジャパソサエティーの副会長だったアーサー・ダイオン(Arthur Diosy)がまた『日本のヒーロー義経(Yoshitsune the Boy Hero of Japan)』というところで紹介している中で、判官鼻眞の一例のような形で紹介しています。皮肉なことに、余波が思わぬところで日露戦争の直後、広まっていき、末松謙澄自身、日本はジンギスカンではなくて、日露戦争というのは決してジンギスカンの戦争とは異なるということを、ほぼ20年後に言わざるを得なくなってきました。

次に日本国内ですが、内田弥八による翻訳です。この『義経再興記』というのは非常に読まれましたが、2番目のベストセラーを生み出した小谷部全一郎が、これに非常に感銘を受けます。小谷部全一郎は決してガチガチのナショナリストではなく、いわゆる明治の冒険野郎です。秋田生まれで、一人で北海道に行き、北海道から樺太に渡り、そこからカムチャツカを越えてアラスカに入り、アメリカに行き



ます。その間に英語を身に付けてハーバード大学に留学して、最終的にはイェールにおいて片山潜と同級生になります。とてつもない人生を歩んだ人物で、虻田でアイヌの人々の教育にかかわっており、北海道に非常にゆかりのある人でもあります。彼の英語で書いた自伝『A Japanese Robinson Crusoe』では自分1人でアメリカまで徒歩で行った過程をロビンソン・クルーソーになぞられています。この自伝がアメリカで出版されます。

なぜ？と思うかもしれませんが、アメリカではこういう自伝が好まれます。『How I Became a Christian』という内村鑑三の自伝がありますが、異国人、異教徒がどのようにしてクリスチャンになったのかという、コンバージョンの告白や物語というのは非常に人気です。その一例として結構、出版できる口があったようです。

ですからこれは内村の英文自伝と非常によく似ています。いかにして私はこの無知蒙昧な異教徒から、このアメリカでのクリスチャンによって蒙を啓かれて、素晴らしいアメリカ社会とキリスト教の伝道に気付いたかという話です。それを書く并接受るからです。小谷部は、彼が言うところによると学費を得るために書いたと言ってますけど、それにうまく迎合した結構面白い本です。ご遺族の方が翻訳をされており、日本語でも読めます。原文と両方復刻されております。この『Robinson Crusoe』の中で『義経再興記』に非常に感銘を受け、それで義経跡をたどりたくなると言っています。

### 小谷部全一郎による義経ジンギスカン説の流行

義経ジンギスカン説がどのように広まっていったかの手掛かりが、この英文自伝に書き込まれています。アイヌの村で村長に、彼らが神と崇拝する義経について質問されて驚きます。小谷部は驚きますが、『義経再興記』を読んでいるから、既に知っているはずですが、むしろ彼がかまをかけたかと思えます。そのあとで、とある著作からの引用を記してアイヌユダヤ起源を書きます。実は先ほど申しましたグリフィスの『The Mikado's Empire』の一節です。『The Mikado's Empire』の中ではユダヤ人ではないと記されていますが、「でない」をカットして、そのまま「である」というふうには彼は引用しているんです。ちなみに、これは彼がよくやる手法で、否定形を全部さも肯定形のようにします。

なぜグリフィスはそんなことを書いたのか。日本人とアイヌの人々の起源はどこにあるのかというのは、ヨーロッパでかなり議論になっていました。そのときにユダヤの失われた10部族の1つではないかという説が、非常に流行っておりまして、グリフィスは、これに対して、著作の中で違うというふうなことを言います。

その後、小谷部は旧土人保護法にも関わります。内村はアメリカに行き、精神病院ですとか教育に非常に興味を持って、日本に紹介しますが、それと似ています。小谷部はアメリカで、ネイティブ・アメリカンの人々に対する教育の方法や、現状に非常に心を打たれます。それを何とかして日本に応用できないかと考え、いろいろと運動をしました。今日ではすっかり忘れ去られていますが、彼は実はアイヌ教育の中でそれなりに大きく足跡を、いいか悪いかは別にして、残した人物です。

1924年には、その英文自伝に書いていることをなぞるかのようになり、本を出します。当時のネタ本が内田弥八『義経再考記』です。国史、アカデミズムの人から反論が出て、その後、また小谷部は書きます。ジンギスカンは源義経なり、源義経は源義経なり。著述の動機と再論ということで弁明します。このときに、末松のケンブリッジの卒論として『The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan』を紹介します。



これ以降、末松卒論説が流布しますが、末松は法学士を取っていますから、ジンギスカンネタで卒論を書いたわけではありません。ちなみに彼は『源氏物語』を最初に訳した人でもあります。彼は、イギリスで一種の広報外交をずっとやっており、いかに日本が存在感のある国かということを示すために、日本にもイギリスと同じぐらい立派な小説があるという意図の下に『源氏物語』を英訳し、そして日本が美と工芸の国であり、国として成り立ってないかのようにいわれるが、実は非常に猛々しいところもある、というようなことをアピールするために、ジンギスカンのことを書いています。卒論ではしっかりと法学を勉強して、帰国したら、ちゃんとローマ法の本を書いています。二枚舌といえますか、優秀な文化官僚です。

小谷部は実際に彼が言うところの満蒙でジンギスカンの足跡を調査することになります。何らかの形で日本の軍部が、許可もしくは援助をしたのではないかとされています。1920年のことです。このあたりは小熊英二『単一民族神話の起源』ですとか、長山靖生『偽史冒険世界』で指摘はされています。

小谷部はオキクルミが義経だという説を援用します。英文の自伝で書かれていることを、そのまま繰り返します。平取で老酋長のペンリから義経の話を聞いたというふうに記していますが、ひょっとして英文の自伝の中で、そのアイヌの村長から義経の話を質問されたというのは、そのペンリ(ベンリ)のことなのかもしれません。

興味深いのは、チタですとか、いくつかの満州の地名を日本語で読み解く手法です。これはあのアイヌ研究で有名なバチュラーがやっていることと非常に似ています。バチュラーは日本の、富士山ほか日本の地名をアイヌで読める、というようなことを言いますが、いわば小谷部はこれをうまく逆用したわけですね。

次にこのペンリ(ベンリ)について。アイヌ語ではべとぺが区別をされないらしく、どう私は発音できませんが、日本語ではよくペンリと言われます。この義経神社の宮司として有名だったこのベンリについてお話ししたいと思います。このアイヌの村長は、アイヌ研究者、アイヌ研究書の中では非常に有名です。村長として内外に向けて多く登場しております。バチュラーのインフォーマントでもありました。

バチュラー自身の熱心な勧めにもかかわらず結局、改宗せず、お酒が好きで、禁酒のバチュラーとよく対立をした人です。イザベラ・バード『日本奥地紀行』には、ちょうど義経神社に、献酒、儀式をしてお酒をささげるところが出ております。デニング『北海道紀行』にも出てきます。キリスト教に対して非常に軽妙に反論するところもあって面白いです。

バチュラーは義経崇拝説に反論しています。義経はオキクルミだといわれているけれども、これはあくまでペンリウク(ベンリ)がお酒を飲む口実にしているにすぎないと。義経、義経というのはあくまで日本人の同化政策の一環なのだと主張するわけですね。だからこそ、バチュラーは、そのように崇拝されているが、その説を否定しています。しかし、バチュラーのせいで、義経が北海道に行ったらしいという説は逆に広まってしまいます。

その一例としてランドーという、ウォルター・サヴェジ・ランドー (Walter Savage Landor) の息子で、世界各国を回り軽薄な旅行記を書いている男の『Alone with the hairy Ainu』というものを紹介します。抄訳も出ています。この中にペンリが登場します。面白いのはノアの大洪水のことを自分が話した後、何日かしてから彼が、さもアイヌの話のようにノアの大洪水の話をしてきたとあって、まったく彼らの話は信用できないということを書いています。記録としてはなかなか面白いものです。アイヌ研究者の中では彼が実際に行ったのか疑う人も非常に多いですが、そこそこ読まれます。バチュラーはこ



の本を非常に酷評しています。

さて、小谷部です。小谷部はその義経がジンギスカンになったという本を書いた5年後に、今度は『日本及日本國民之起原』という本を出し、日ユ同祖論を言い出します。日本人とユダヤ人は一緒だという、今も時々あるオカルティックな説です。そのときの根拠としてペンリウクを出します。

ペンリウクとダーウィンの写真を見せてよく似ている、マルクスともう1人の写真がよく似ている、アイヌというのはユダヤ人と非常によく似ているのだ、と。グリフィスが否定したアイヌユダヤ起源説を使います。噴飯物で今のアイヌの人にとって失礼極まりない話ですが、19世紀に流行ったアイヌユダヤ人起源説、ユダヤ人の10部族のうちの1つが逃れ逃れて日本にたどり着いた、と。ちょうど義経の逆になります。

ヨーロッパでは、もともと中央アジアなりどこかにいたユダヤ人が、東へ東へと行って日本にやってきたという説があります。小谷部のものと逆転するわけです。それで日本人というのはアイヌ人との混血だというわけです。パチュラーをほぼ踏襲しています。日本人はもともとユダヤ人なんだという論法なわけです。富士山ほか、日本の地名はアイヌ語だと。これもまったくパチュラーの言っているのと同じだと思います。

次にグリフィスです。グリフィスは『みかどの帝国』の中で、アイヌユダヤ起源説を白人説を使って、否定しています。アイヌは実はアーリア人だと言います。これも一時期、非常に流行った言説です。ただ、これが発表された時期は日本政府にとっては非常に好都合な時でした。1907年に持論を展開していますが、1906年にサンフランシスコで日本人学童が隔離されるという問題があり、日米関係の間でいわゆる紳士協定というか秘密協定の形で移民についての規制がなされます。それから1924年の排日法、排日移民法に至るまでずっと確執が続きますが、ちょうどそのときにグリフィスは「日本人は中国人とは違ってアーリア系なのだ」という訳です。これは日本政府にとって非常に好都合です。このせいかどうか、この直後にグリフィスは勲章をもらっています。ですので、何らかの形で日本政府はこれを非常に珍重したことが分ります。

この排日移民法は、言うまでもなく小谷部の議論と関係してくるわけです。排日移民法のことを踏まえ、実はジンギスカンは義経だと小谷部は言います。ちょうど日本人の同胞たちが散らばっていて、世界中で差別をされている、それはおかしいと。こういうものに対してむしろ我々の方が攻めていく、日本人は白人たちのそうした差別の中に甘んじるような民族では決してなく、ジンギスカンのあの精神を思い出せ、今こそ新たなジンギスカンを、というアジ文で締めくくられます。1920年のときです。

排日移民法を踏まえていることは、ジンギスカン伝説のときに指摘されない点で、トンデモで一笑に付してしまいがちですが、が、やはりこの当時の排日移民運動に対する反発というのも、非常に大きな動機としてあったと思います。その小谷部説が後にどのようにインパクトを与えたかということで、次に移ります。

## 黄禍論とジンギスカン説

ジンギスカン伝説を見るときに、見落とされがちなのはジンギスカンのお墓です。ジンギスカンのお墓の中には何か秘宝が埋まっています、そしてその秘宝を見つけ出した者はいわば世界の王となる、という聖杯伝説のようなお話があります。これを広めたのは先ほど申しましたブラヴァツキーです。



『Isis Unveiled』(ベールを脱いだイシス)という、オリエンタルなものを放り込んで一緒くたにした、オカルティズムの一種、一番の原点といった本です。この中で出典はどこか分からないですが、「モンゴルの伝承」をポロっと書きます。たぶんうそでしょうが、「モンゴルにはこういうふうな伝承がある。墓の中で眠っているジンギスカンというのは数世紀後に目覚めて、そして再びモンゴルを導いて栄光をもたらす」と。

興味深いのは、黄禍論のモチーフになってくるところです。これも小谷部の本にもあります。当然、ヨーロッパにしてみたらジンギスカンは黄禍のシンボルになっていくわけですね。ソ連の映画『アジアの嵐』(1928年、フセヴォロド・ブドフキン監督、原題名は『ジンギスカンの末裔』)は、イギリス統治下のモンゴルで、ソ連のバルチザンになったバイルはお守りからジンギスカンの末裔であることが分り、それでイギリスの傀儡君主になるが、モンゴル人を決起させてイギリス軍を敗走させる、というとてもないストーリーです。これを裏返しにしたのがハリウッドの『成吉思汗の仮面』です。



この『ジンギスカンの仮面』は、サックス・ローマー、アイルランド系イギリス人が、彼が1913年に書いた『The Mask of Fu Manchu』という小説の映画化です。つめのような手を持ったナマズ髭の男、フー・マンチューは怪奇俳優ボリス・カーロフが演じています。これが実はほとんど、サックス・ローマーの原作に基づいていません。原作、原作と言いますが、かなり改編しています。それがこのジンギスカンの墓伝説ですね。ジンギスカンの墓にある仮面と剣を入手すると、第2のジンギスカンになれるという伝説があって、チャイナタウンの首領であるフー・マンチューが、その英国人が発掘した墓を先に暴いて、仮面と剣を手にして世界の盟主になろうとして失敗するという話です。

あともう1つが『Thank you, Mr.Moto』という日本未公開の映画です。ミスターモトは、30年代に非常に流行ったアメリカでの日本人エージェント話です。モト・ケンタローはピーター・ローレという、フリッツ・ラング監督の『M』に出ていた、目がギョロとした小男が、日本人のエージェントの役をやっています。機会があれば是非、ご覧になってください。YouTubeで簡単に見られます。

完璧な日本人英語を使って、日本人そっくりの振る舞いで、ニコニコしていますが、実は他人よりすべてのことが分かっている、柔術の達人で、最後にはみんなの裏をかくという、そういうひどい抜け目ない日本人というものを、比較的肯定的に描いた作品です。このミスターモトが活躍する映画は、30年代から日米関係が悪化してくると作られなくなります。

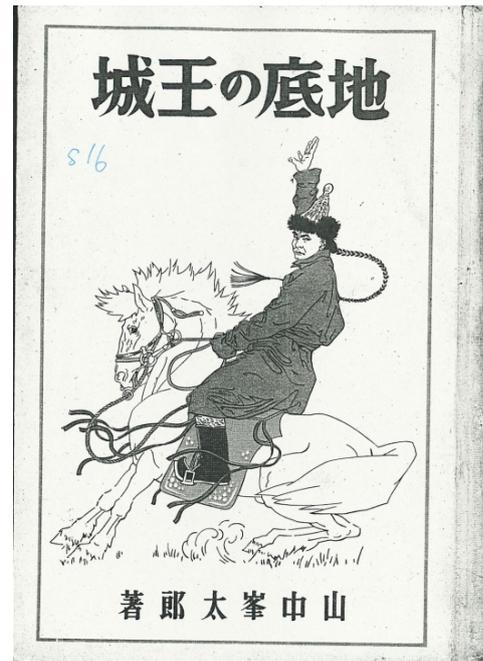
ミスターモト・シリーズの中の1つが、ロシアとドイツの窃盗団からジンギスカンの墓にある宝を守るというものです。その宝を取られると、それが世界の覇者になってしまう。後に80年代にスピルバーグが『レイダース 失われた聖櫃』でやる聖杯伝説のオリエンタル版というか、黄禍論版です。

ジンギスカンの墓の元ネタは実はあります。私は未見ですが、ソ連の探検家ピョートル・コミノフなる人物が、1927年11月、ロンドンのサンデー・エクスプレス紙でゴビ砂漠のカラコルムの廃虚でジン



ギスカンの墓を発見したと発表し、ロイターで世界中に配信されます。それでジンギスカンの墓をめぐる競争みたいなものが始まります。

おそらくこの延長に、NHK が大好きなジンギスカンの墓や江上波夫につながっていくのだと思います。ジンギスカンの墓探しというのは、日本版は当然ながら黄禍の物語になります。ストーリーラインがそっくりな一例として加藤武雄『源義経と成吉思汗』があります。1933年ですから、満州国建国にかかります。これは小谷部説をほぼ踏襲した作品です。



山中峯太郎という冒険小説家の『地底の王城』にも、このジンギスカンの墓伝説が使われます。ジンギスカンの墓をみんなで探そうという話です。少年少女が、ロシア、ドイツ、アメリカといった様々なエージェントたちの嫌がらせにもかかわらず、見事、墓を見つけ、お馴染みながらジンギスカンは義経だったことが判明する、という苦笑するような話です。

ジンギスカンが満州で政治的に利用されたことを見ておきます。小早川秋声という戦争画家として最近注目されてきている人物です。彼の「絶目盡吾郷」(ジンギスカン)。第13回帝展に出展したジンギスカンの絵です。ジンギスカンを描く絵が流行ったというだけではなく、ここに棧があり、満州国建国記念として書いてありますね。この満州国建国でいわば日本・満州のシンボルとして、ジンギスカンは使われている。

もっと露骨に、小谷部に文字通りインスパイアされ、実際に蒙古に行って描いてしまったのが川端龍子です。この人の1938年の屏風画『源義経<sup>ジンギスカン</sup>』です。同じく1940年に描かれた、小早川秋声の「源義経」です。

先ほどの『地底の王城』にしても、この絵にしても、馬やラクダが西というか、左を向いています。日本の絵画では、左が西側です。だからいざ西へ、いざ大陸へととなります。このころのこの手の絵を見ますと、みんな左を見ています。面白い資料ですね。

この川端龍子の絵にインスパイアをされ、花柳寿太郎が舞踊を1938年に作っています。



満州での話でいいますと、小谷部の『成吉思汗ハ義経也』は何度も改訂され、増補しています、1939年が一番最後の版で、さらに増補しています。その中で満州日日新聞をそのまま引用します。満州日日新聞では1932年から1933年の建国期に、前述したジンギスカンの墓をめぐるお話と同じようなキャンペーンが張られます。そのまま源義経の墓としてキャンペーンを張ります。ジンギスカンは義経だ、というのがこのころかなり満州日日新聞に出てきています。新聞でここまで言っていたのは当時としてはこの満州日日新聞だけです。



また、出口王仁三郎がモンゴルに入ります。いろいろあって彼はむしろ騒擾し過ぎるということで、日本へ強制送還されますが、そのときに彼が信じていたのが義経ジンギスカン説です。彼がそれをお筆先のようにして記させた『月鏡』という本があり、義経はジンギスカンなんていうようなことを言います。ジンギスカンが起兵した後、666年後に英雄が再来するというモンゴルの伝説を紹介して、自身の遺言になぞられています。

666年後は既にブラヴァツキーの『Isis Unveiled』で紹介されています。オカルティックなおなじみの666。666年後ごとに変な英雄が出て世の中を一種リセットするというのです。王仁三郎はこれをどこかで聞いたのでしょうか。出口王仁三郎はかなり神智学を利用していると思うのですが、かなりブラヴァツキーから来たのではないかという気がいたします。

このような、自身になぞられるというか、この声を聞くというのも実はすごく重要で、最後にその例を挙げておきたいと思います。1939年の増補版で小谷部は、降霊術師にジンギスカンの霊を降ろしてくれと頼みます。降霊してもらい、色々聞いたらしいんです、「あなたは源義経ですか」、「そうだ」と言ったらいい。これも噴飯物ですが、小谷部は、ほれ、見たことか、と一問一答を非常に得意げに全部書いています。

一見、非常にふざけていますが、実は高浜虚の例と非常に響き合っています。先ほど冒頭で漱石と一緒に連句をやった話をしました。そのとき高浜虚子はそんなことを思わなかったんでしょうけど、1942年に『義経』という恥ずかしい能を書いています。シンガポール陥落に触発されて一気呵成に書いたものとされます。全集からは外されていますが、義経の霊が降臨して、自分はジンギスカンだ、という話です。だから実は小谷部の話と構造がまったく一緒です。小谷部も途中で、非常に怪しげな話になりますが、オカルティズムになり、セアンス (seance) のような降霊術にはまってしまう。自分は義経だ



ったかもしれない、義経のそうした霊が俺にこれを書かせるんだというようなことを言い出します。

能は、基本的に霊を呼び寄せ、霊が降りてきて、その霊と交感することで、今いるワキがそのお話を聞いて、その霊のメッセージを受け取るという形式です。よくあるオカルティストと片付けがちなんですが、その構造を当時の文芸にうまくはめ込んだといえます。これは結構見逃せないところです。霊は英霊のようなその存在である、その英霊のメッセージを聞くんだ、その英霊のメッセージに耳を傾けよう、そして大東亜の建設に邁進せよという話になるんです。

その当時よくあったナショナリズムの典型的な技法ともいえます。こうして見ると、小谷部は実は非常に伝統的なことも分ります。非常に奇矯な、アメリカに渡ったり、オカルティズムに突っ込んで日ユ同祖論みたいなことを言っています。

戦後になると、そうしたオカルティックなところは取り外されて、悲恋と冒険の主題だけが継承されます。ジンギスカンの墓に宝があるというモチーフは、その後、リサイクルされます。1959年から1960年の『豹の眼』というテレビドラマです。『豹の眼』は高垣眸原作の大衆小説で、かなり本案に近い形でテレビドラマ化されます。この『豹の眼』の中でササリンドウが出てくるんです。ササリンドウは言うまでもなく、義経の紋です。

あと宝塚歌劇です。植田紳爾という、『ベルサイユのばら』を生み出した大プロデューサー、劇作家がいますが、彼が『ベルばら』の前に手掛けたグランドロマンミュージカルが『この恋は雲の涯まで』(1973年)です。義経ジンギスカン説をほぼそのまま踏襲しています。静と義経が離れ離れになりながら何とかして会おうとする。ちなみに高木彬光の原作は完全に悲恋の物語として書かれていますが、それをミュージカルにしたものです。

義経は最終的には金国に行き、衛紹王のところに行って、舞を踊り、いろいろ軍功を認められて、最後はジンギスカンになって、挙兵、鬨の声を上げます。そのシーンの後ろにしっかりササリンドウの紋があります。これは現在、北海道平取町の町章にも使われています。



ちょっと雑駁でしたが、源義経ジンギスカン伝説というのは、非常に奇矯なところから出発したにもかかわらず、その源が実は非常に欧米のオカルティズムを巧みに利用して、逆転しているということが非常に面白い。そこには、やはり小谷部が教養、教育をアメリカで受けていたことを、見逃すことができないわけです。それが1930年代になって非常に政治的に利用されていき、同時に大衆文芸の中で一種活力といいますか、賦活を与えて、アメリカでは黄禍論と、日本でもそれと実は同じストーリーが共有されていきます。

戦後にもほぼつながり、元々はブラヴァツキーのところから始まった降霊術であるにもかかわらず、日本の伝統的な能という中に最終的には閉じ込められている。と考えますと最初にくしくも1904年に行われた漱石邸のこの句会から高浜虚子まで、実は1本でつながるのではないかというお話になります。



長々となりましたが、ありがとうございました。

(司会) 義経ジンギスカン伝説という、一見すると非常に奇妙な、エキセントリックなテーマを扱いながら、非常に幅広い視野でこの問題を紹介、検討してくださったと思います。私も全然知らなかったのですが、これだけ古くからこの伝説が何度も繰り返されてきたわけで、今日、お話のメインになったのは主に 20 世紀の前半、戦前の日本の近代化の中の、日本の特異な時期にとりわけ焦点を当てておられましたけれども、その前からこの義経伝説の萌芽はあったわけで、現代日本にもその伝統はつながってきているといったことは、何が繰り返され、何がそうでもないものかといったところにも、最後のお話はつなげられていたのではないかと思います。

会場の皆様から自由に質問あるいは感想などを。

(Q) 私は、昔、『ムー』を読んでいた時期があります。今日のお話で何人か登場されていますが、どの人が天然でどの人が確信犯かというのはわかりますでしょうか。『ムー』の面白いところは、ほとんどが確信犯なのですが、自分と同化しちゃう天然がいるところだと思うのです。

(橋本) おっしゃるようにプロヴォカトゥールの例で、何かを扇動するために分かってやっていたはずが、本当に自分がそうになってしまうという、非常にオカルティズムなものです。最終的に二重スパイになってしまうというのはよくあるのと同じですよ。

このジンギスカンもそうだと思うのです。ですから本当にグラデーションのようにいつの間にか同化しちゃいます。末松はもう明らかに確信犯。彼は途中からまったく身を引いて、まったく書いたことがないかのように振る舞い出します。彼は全く政治的に利用した人です。『源氏物語』もさして好きではないのに訳していますから。ですから彼は非常に勤勉でまじめな官僚ということになります。

小谷部になるとグラデーションが典型的になって、最初はかなり意図的に行ったはずですが。ですから黄禍論が、日本人排斥のアメリカでの、非常にルサンチマンな形から始まっているわけです。自分に機会を与えてくれて勉強させてくれて、そして非常に役に立つ英語力も身に付けられた、このアメリカに恩義があったにもかかわらず、そのアメリカで最も日本人が差別されている。そのダブルバインドというようなことがあり、それで最初は義経ジンギスカン説に持っていったのが、だんだん霊の話になります。彼は最初、かなり方便として書いてます。義経ジンギスカンものを書いた動機と陳述という、その翌年に書いた反論の方では、何だかんだ言ってそうであった方がいい、というふうなことを書いています。どちらかという方便としてアジア主義なり、日本のナショナリズムに役立つから使った方がいいということを言いますが、だんだん周りに信じている人が出てきて、変な話を吹き込まれていって、自分もそうかもしれないというふうに思い出して、それで自分自身がだんだん変わっていった例だと思います。

高木とかこのあたりは完全にもうお話として使っている気がします。ペンリは微妙なところでしょうね。義経が本当に来たのかどうかというのは、彼自身はどっちでもよかったのではないかと思います。グリフィスはよく分かりません。グリフィスもシーボルトも、こういうものがある、と紹介しているだけで、さしてそんなに信じてはいなかったんですね。ただ白人説を唱えたというのは、非常に政治的な意図だったと思います。



トンデモ本と片付けられがちな話というのは、やはり日本の国内だけ見ているとそれが分からない。やっぱりアメリカに対する宣伝、アメリカに対する反論として書かれているという側面が非常にありましたから、ちょっと微妙なところですね。

ちなみに小説を書いた加藤武雄ははっきり前書きで「分かりません、でもその方が面白いでしょう」と書いてあります。山中峯太郎もちょっとボーダーラインです。この人はアジア主義に邁進せよというふうな冒険小説をたくさん書いて、でもこの冒険小説が戦後の漫画や物語の原型になっていく。ちょっとボーダーラインです。

川端龍子のはっきり信じている。蒙古に行つて、義経ジンギスカンを確信するのです。そのあたり恥ずかしい文章は全部残しています。小早川秋声はちょっと微妙です。王仁三郎は信じていました。高浜虚子がちょっと分からないですね。一種、能の形式なので、そのジンギスカンの精神や霊の声を聞けという点では、信じている、信じないかは問題ないのです。だから高浜虚子の例は実はすごく面白いと思います。

テレビドラマの方は、面白いから使っているという感じで、植田紳爾さん自身もあまり信じてはいないみたいで、『君の名は』のように、あくまで基本はその静と義経との『大陸をかけた擦れ違いドラマですから。でもオカルティストと同じように、意図的に行っている人間がだんだん実際、信じてしまうというのは、非常に重要ではないかと。

(Q) 非常に興味深いお話、どうもありがとうございました。源義経より若干時代が下がりますが、鎌倉時代の歴史上の人物として日蓮上人がいます。その日蓮上人の弟子が、やはり義経とまったく同じルートをたどったという伝説が北海道にあります。日蓮上人の高弟に日持上人というのがいたということになっており、まさに鎌倉時代に蝦夷に渡って、蝦夷からサハリンとかの大陸の方に渡って、日蓮宗を布教したという伝説が函館のあたりには起こっています。鎌倉時代に義経が渡ったという伝説があり、なおかつ100年ぐらいずれて同じく鎌倉時代に、日蓮上人の高弟の日持上人がやはり蝦夷から大陸に渡ったという伝説、こういう伝説が2つあるというのは、当時の蝦夷と大陸との間に一定のやはり人的交流があったということの1つの痕跡があったということなのではないでしょうか。

(橋本) やはりアイヌの人々の人類学的な興味というのはものすごくあったんですね。1910年、日英博覧会がロンドンで開催され、アイヌの人々がロンドンでいわば展示をされています。そのときに、白人が奴隷になった、白人が一種、退化といいますか、原住民化して黄色人種が支配者になった、逆転した関係というふうに見られたところがありました。特にアメリカでそういう話が非常に多かったんですね。

アメリカではモンゴロイドであったネイティブ・アメリカンが、ほとんど滅びゆく人々になっている。日本では逆にコーカソイドだったアイヌの人々が滅びゆく人々となっている。失礼な話ですが、一種、人種闘争が典型的に逆転した例というふうに見えられたところがあります。要するにアイヌの人々の起源を探ることにものすごく関心が高かった。ご存じのように北海道大学は片棒をちょっと担いだところもあります。ですから、骨を集めたというのは決して単なる人類学的な関心だけじゃなく、その当時の人々の熱い、人種的な自尊心にもかかわる話でもあったと思います。それは日本にとっても好都合だっ



た訳です。人種優劣論を覆す一番いい例です。コーカソイドが必ずしも優れているわけではない、文明というのはまったく関係なく、黄色人種も十分それだけの文明を達成できるという一番いい例でした。

ですので、アイヌの人々がどのようにして樺太や旧満州のところから渡ってきたのか、旧満州、樺太の人々とアイヌの人々の関係については、非常に関心があって、その中で彼らがこう来たのだから、逆にこうも行けるはずだというふうに逆転しているのです。そうしたアイヌの人々があっちからこっちへ来られるんだから、むしろこっちからあっちに行ってもおかしくないはずだと。

ちなみに先ほど『ムー』が出ましたけど、チャーチワードというアメリカのちょっとよたった男が『ムー大陸』というふうな変な本を出します。そのチャーチワードが言うには、日本は白人だと。白人でない限り文明が継承できるはずがないと言うんです。日本人が文明人なら、それは白人なはずだと。彼らは実はアイヌの白人の混血だから、だからロシア人に勝てたんだと、非常に苦笑するような話です。

日ユ同祖論というのは、トンデモというよりはそういうふうに読み解く必要がある。キリスト教徒の中で、世界中の部族というのは全部失われた10部族の中の末裔だという説が、聖書の原理主義者に非常に強い。小谷部はもともとクリスチャンでしたから、全部逆転させています。

アイヌの人々が来られたんだから、日本人が今度はあっちに行くべきだと。それだけつながりがあるのだから、日本人と満州というのは非常に密接な関係がある、というふうに逆転させるのです。ですので、私は初めて聞きましたが、日持上人や義経の話を使っているというのは、ちょうどそうした時代の頃と考えると何となく合うのかなという気がします。

(Q) 昔、弟子屈あたりの出身の詩人から聞いたことがあります、弟子屈あたりでも義経伝説があると。東に来れば来るほど義経と弁慶の評判が悪くなる、粗暴で女たらしになってくるというふうになっているんだと。だからあっちの大陸に渡ってジンギスカンになんかなるはずがないというふうなことが、あの辺では、弟子屈一帯で話されているというんです。その人はアイヌの人と毎晩のように酒を飲んでいて詩人だったと思うんだけど、そういう中で語られているらしい。

そういうような酒の場で座談として語られる東の方のアイヌの人々の義経像という、ペンリウクの受けた話と、それから物を書く人たちが義経を再ソートをしていくというか、そういうことには大きな乖離があるところもあると。なぜ書く人たちがそのような乖離を生じさせるのかというか、それは1つの想像作業として認めるべきなのか、評価するべきなのか、その辺はどうお考えですか。

(橋本) その辺はいわゆる文化人類学でいう表象の問題に非常に近いんです。だからペンリの例が一番いいと思います。彼は本当にうまい。日本側にしても、アメリカ側にしても、イギリス側にしても、その彼らに、どちら側にも取れるようなことを言うわけですね。だからこそ小谷部はそれを非常にうまく利用したわけです。

小谷部は最初、ペンリウクの話と義経が来たという証拠として使うのですが、もう少したつとユダヤ人という証拠に使うんです。ただそこには、彼らが決して反論してこないだろうという、ある種傲慢な、いわば書かれる側と書く側の典型的な支配、被支配の関係だと思うのです。だから本当に典型的な文化人類学の記述される側と記述する側の力関係が、非常に分かりやすく出ていると。

ただ、そのときに記述される側のアイヌの人々というのは決して受け身であったわけではない。うまく迎合し、彼らの思惑にうまく乗るように話を作り、そしてある種トリックスターのように酒でごまか



しているところが非常にあります。そこがやっぱり私はこのペンリの非常に優れた点だと思う訳です。

欧米の人類学者が懺悔気味に語る「すみません」と片付けてはもったいない気がします。書かれてない人々に対する暴力をもっと自覚せよというのは、オリエンタリズムによくいわれて、これはまさに小谷部が再生させているわけです。書かれるだけの存在だった日本人、書く存在として彼はまさに発言して発信していくわけです。

それはもう典型的なオリエンタリズムのいわば縮図です。日本・アイヌと、日本・西洋、日本・アメリカ、これをうまく小谷部は立ち回っている。ですから当然ながらアイヌの人々、は切り捨てられるのですが、ただ、そこでまさしく小谷部が立ち回っているようにペンリも立ち回っている。このことは見落とすべきではない。私はペンリがその点で小谷部にとって非常に似姿ではないかなという気がします。ペンリがやっていることをもう1回、小谷部は日本、アメリカでやっているような気がします。

ですから、オリエンタリズムと言えばそれまでですが、その間にうまく努力・妥協をした人々という点で、私はペンリと小谷部というのは非常によく似ているし、そこを単に迎合者というふうには片付けられないという気がいたします。

(Q) 同時期のイギリスの側、もしくは欧米の側ではどれぐらい広まっていたのか、さらにはそれが今現在でも何か痕跡が、例えば『ハリー・ポッター』に痕跡があったりとかすると楽しいのですが。そういうものがもし何かございましたら、ご紹介いただければと思います。

(橋本) 「ジンギスカンは義経だ」と言っても、ジンギスカンは知っているけど義経は誰？ というのもありますので、あまり広まらない。ですからあくまで日本研究のサークルでしか広まらなかった。アーサー・モリスンは浮世絵の収集家で、ブリティッシュミュージアムに彼の日本画が寄贈されています。そういう関係で彼は関心を持っている、神智学は東洋的なもので関心がある。神智学協会のこの紹介も面白くて、これを書いたフォンデスという人の源義経はカラス天狗から魔道の知恵を教えてもらったというのです。スーパーナチュラルな血を受け継いで、それで彼はジンギスカンというものがヒーローになったのだというのを結構書いています。が、どちらかという非常に狭いサークル内の話です。

重要なのはジンギスカン・イメージというものを考えるときに、末松とか日本人は必ず「ジンギスカンは日本とは関係ない」ということを言うんです。あくまであれはモンゴルであって、日本、中国は関係ないということを非常に力説します。でも、「そうじゃなくて結局この辺全部一緒でしょう」と言うときに、この説が使われます。

だから本来おかしいわけです。中国を占領したのがジンギスカンですし、モンゴルの草原民族ですから本来違うはずなのに、「いや、彼らは実は同じで、同じものを共有していて、それで西洋に歯向かってくる脅威なんだ」という、いわばジンギスカン脅威論というような、ジンギスカンが本来、日本や中国とは別なものなのに、それが一緒くたで語られる、その根拠として使われます。ですから日本、中国とかが攻めてくるというときには、ジンギスカンのイメージは必ず使われる。

『ハリー・ポッター』や、ディズニーの作った『ムーラン』。『ムーラン』に出てくる悪い兵隊はどう見てもジンギスカンです。中国の中で「良い中国人」、「悪い中国人」と分けるときに、悪い中国人の表情にはジンギスカンらしいものがいまだに使われているいい例だと思います。

そうした黄禍論にジンギスカン・イメージは非常に重要です。義経というところは重要ではなくて、



「日本、中国、モンゴルが実は一緒だった、何かがあったら、数に物を言わせて攻めてくる」というのにいまだに使う。そういう点で末松は非常に罪深いことをしたことになります。

(司会) ありがとうございました。残念ながらもう時間が過ぎてしまっております。このテーマは橋本先生もここでの北海道大学で資料収集の結果などを踏まえて、また大きな1つの論法として発表されるご予定だと思います。その際は皆さん、ぜひ手に取って読んでくださればと思います。今日はどうもありがとうございました。



## 北欧型新自由主義の到来

日時 2012年6月21日(木)、16:30-18:00、北大スラブ研究センター4階大会議室

報告者 橋本努(北海道大学)

(司会、福田) 今日には北大の経済学部で橋本努先生においでいただきました。橋本先生は北大ではたぶん一、二を争う多作な研究者で、非常によく知られた方ですけれども、今年の5月に『ロスト近代』という、私の計算が間違っていれば8冊目の本を出されて、そのほかにもタイトルだけを挙げれば、『自由の社会学』、『社会科学の人間学——自由主義のプロジェクト』、『自由の論法——ポパー、ミーゼス、ハイエク』といった、いずれも自由、あるいは自由主義ということにかかわるご著書を出されてきています。

今日は「北欧型新自由主義の到来」ということで、私たちは一般的には北欧諸国に対しては福祉国家のモデルということ、理想的なイメージといえますが、非常にポジティブ、肯定的なイメージを持っていますが、実はそうではなくて、それでも北欧には何がしかの興味深さ、面白さがあると。それを踏まえた上で、我々の社会はどこへ向かえばいいかについて考えてみたいというご報告ということでしょうか。よろしくお願ひいたします。

(橋本) ただいまご紹介にあずかりました橋本です。どうぞよろしくお願いいたします。今日お話ししたいことは、北欧社会が新自由主義化していること、思想的・理論的な意義についてです。いったい私たちは、これまで北欧は「福祉国家」型で、これに対してアメリカは「市場原理主義」型というかたちで、思想的に単純化して捉えてきました。アメリカは日本よりも人口が多く、市場を重視した社会である。これに対して北欧諸国は、日本よりも人口が少なく、国家主導の経済運営が可能になっている。日本は人口としては、アメリカと北欧諸国ですので、経済体制についても、アメリカと北欧の間を探ることが望ましいのではないかと。例えばそれは、ドイツ型やフランス型であり、日本はこれらの欧州諸国を見本にすべきだ、というのがこれまでの知識人の典型的な発想ではなかったかと思ひます。

この10年間、日本で例えば「格差社会」ということが論じられる場面でも、構図としては、北欧の福祉国家に学ぶのか、それともアメリカの市場社会に学ぶのか、という議論が立てられました。北大法学部の宮本太郎先生は、北欧型の社会をモデルにする一番名の知れた論客ですね。これに対して八代尚宏さんという国際基督教大学の先生は、新自由主義型のカナダをモデルにすべきだ、という論陣を張っています。

ところが彼らの主張をよく吟味してみると、2人とも言っていることは同じなんじゃないか。読んでみて思ったんですね。どうも北欧型と言っている人たちも、あるいはアメリカ型とか何型と言っている人たちも、同じところに着地点がある。ということは、北欧が新自由主義化しているということではないか。

ところが北欧の研究者たちは、「北欧が新自由主義化している」とはなかなか言わないんですね。実はこれはバイアスがかかっていると思うのですが、北欧の研究者たちは、そもそも福祉国家の構築に関心があって、その失敗についてはあまり言わないんですね。やっぱり福祉国家に思い入れがあって、北欧がいかに新自由主義化しているかについては、日本語であまり報告されていない。ただ、そうではない



北欧の研究者も何人かおまして、いろいろ分かってきた面があります。そのような報告と、アメリカやカナダの動向を突き合わせてみると、どうなるのか。これが最初の論点です。

それを踏まえまして、最後に考えてみたいのは、では私たちが望むべき経済社会はどういうモデル(理想)なのか、という規範的な問題です。「グローバル化」ということに引きつけて言いますと、じつは選択肢は、ほとんどなくなっている。可能な選択肢がかぎられたなかで、細かいところに論点が移っているわけですが、それについて、私は思想的な観点から考えてみようと思います。

最初にお手元の資料をご覧ください。最初に注目してみたいのは、「80年代における租税負担率と経済成長率の関係」というグラフです(図表1を参照)。これによると、傾向は明らかで、高率の税を課すと、それが経済成長につながらないということが見て取れるんです。80年代に経済成長している国は、比較的税率が低いですね。

【図表1】1980年代における租税負担率と経済成長率の関係(神野直彦/井手英策編『希望の構想 分権・社会保障・財政改革のトータルプラン』岩波書店、2006年、12頁、および、橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、131頁、参照。)

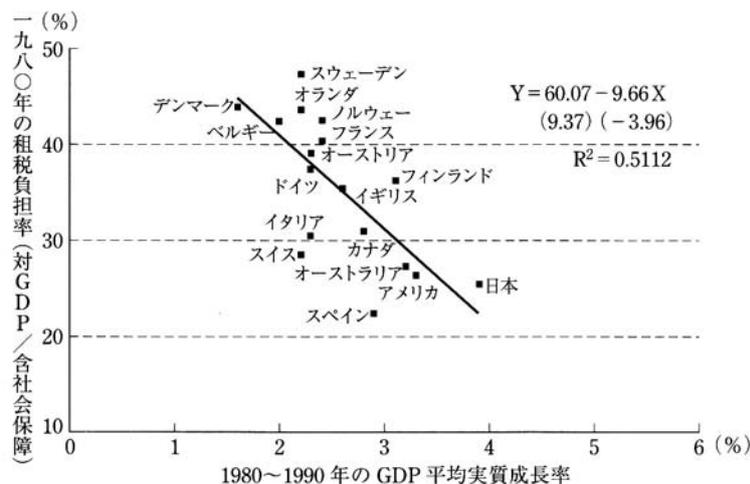


図2 1980～1990年の経済成長率と租税負担率

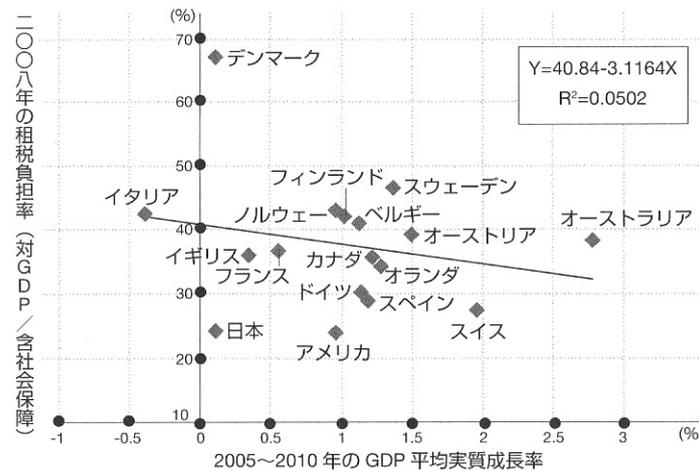
ところが90年代になりまして、どうもそれが当てはまらなくなってきました。高率の税を課している、例えば北欧諸国ですね。それが経済のパフォーマンスがよくなったというのがあります。それに対して、日本は税率が低いんですけども、どうも経済のパフォーマンスがよくない。総合的に見ていきますと、どれだけ税率を課すかということと、経済成長率は、相関していないという結果になるんですね。税率を高くしても、経済成長する可能性はある。

では、その後どうなったのかということ、ゼロ年代のグラフを自分なりに作ってみたのですが、税率と経済成長のあいだには、やっぱりある程度の相関関係がみられるようになったんです(図表2を参照)。税率の低い国のほうが、経済成長している。ところが標準偏差から乖離している国もたくさんあります。ですので、相関関係はしだいに偶有化していった、とみることができます。税を上げて経済成長する可能性はあります。そのような可能性が見えてきた、というのがこの20年間の経験ではなかったか、



と思います。ただ、税率を上げる政策というのは、新自由主義政策の正反対というわけではありません。事態を詳しく見るために、まず北欧諸国がこれまで、新自由主義化してきた経緯についてみてみましょう。

【図表2】2005-2010年の実質経済成長率（平均）と2008年の租税負担率の関係（橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、132頁、参照。）



### 「北欧諸国の新自由主義化」

1991年、いまから約20年前の段階ですが、スウェーデン政府は思い切った税制改革を行いまして、所得税の最高税率を73%から51%に引き下げました。さらに、法人税も57%から30%へと、約半分くらいに切り下げています。法人税はその後、さらに引き下げられて、26.3%になっているんですね。半分以下になっていることが分かります。OECD諸国の中でも、最低の水準になっている。

スウェーデンではほかにも、さまざまな税制改革が行われまして、消費税の比重は高まっています。これに対して所得税や法人税が引き下げられている。さらにスウェーデンというのは、いわゆるケインズ的な積極的財政政策を採らなくなったんですね。経済を回復させる別の方法として、金融機関に自己資本増強のためのお金を支援する、という仕方があります。かりに金融機関が多額の不良債権を抱えたために、貸し渋りが生じ、結果として経済が停滞したという状況を考えてみましょう。そのような不況を打開するために、ケインズ型の公共投資をするのではなく、国が銀行を指導して、不良債権処理のためにお金を使う方法があります。このような介入の仕方は、基本的には、マーケット・メカニズムの回復を展望する点で、ケインズ型の政策とは区別されます。市場経済を促進するための政策と言うこともできるでしょう。スウェーデンはそのような方向に、政策を転換していきました。

それから、これはショッキングかもしれませんが、スウェーデン政府は、相続税と贈与税を廃止してしまっただんですね。また、高所得層に対しては実質的な所得税減税を行って、これまで追加的に導入してきた「富裕税」も、富裕税というのは1,800万円以上の資産を持っている方に課せられる税ですが、廃止してしまっただんです。さらに、住宅税を廃止したり、失業手当を減らすなどして、いろいろな面でスウェーデンは新自由主義化していくわけです。



失業手当の充実化という理想は後景に退きます。では政府は何にお金を使うようになったのかというと、例えば職業訓練なんですね。失業した人が仕事に就けるように支援しましょうということで、仕事探しを手伝うタイプの政策に変わってきた。

しかも高学歴層が増えていくと、それまでのコーポラティズム体制が維持されなくなっていく。コーポラティズムの体制では、労賃をめぐる、産業別労働組合を通じて団体交渉するのが基本です。ところが高学歴の人は、もはや既存の産業とは別のセクターで職を見つけるようになっているし、労働組合の組織率も下がってくる。こうなると労働組合の賃金交渉力は低下して、賃金決定のモデルはかなり変わってきているんじゃないかと想像できるんですね。

では今のスウェーデン、あるいはフィンランドは、どういう経済体制なのでしょう。エスピン＝アンデルセンという有名な経済学者がいます。デンマーク出身で、いまはスペインのバルセロナで教鞭をとっている。かれの有名な分類で、「自由主義／社会民主主義／保守主義」という三類型があります。図をご覧ください（図表3を参照）。これをみると、アメリカは、市場の役割は「中心的」、家族の役割は「周辺の」、国家の役割は「周辺の」とされています。これに対して、スウェーデンは、国家の役割が「中心的」で、これに対して家族と市場の役割は「周辺の」とされています。ドイツやイタリアは、家族の役割を重んじて、市場と国家の役割は「周辺の」とされています。では日本はどの類型になるのかというと、アンデルセンによれば、自由主義と保守主義の間くらいだと見えています。

【図表3】アンデルセンによる福祉レジームの三類型（橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、138頁、参照。）

	自由主義	社会民主主義	保守主義
家族の役割	周辺の	周辺の	中心的
市場の役割	中心的	周辺の	周辺の
国家の役割	周辺の	中心的	補完的
典型例	アメリカ	スウェーデン	ドイツ・イタリア

しかしどうも、アンデルセンのいうこの「社会民主主義」のモデルは、近年になって崩壊しつつあるのではないかと。いくつか手掛かりがあるんですけども、これは丸尾直美さんという、福祉国家研究者の見解ですが、彼が90年代に著した論文の中で、アメリカと北欧はいずれも市場メカニズムを重視している。金融資産の活用についても、両者とも重視している。これに対して日本は、不十分な仕方しか活用してない、というようなことを述べています。アメリカと北欧は考え方が似ているのではないかと、という理解が福祉国家研究者の中から出てくるわけです。

では何が理想の体制なのかということで、アンデルセンはその後、新自由主義のモデルを認める発言を繰り返しています。では新自由主義とは、どんなモデルなのでしょう。じつはアンデルセンの三類型では捉えられないんですね。そこが問題です。アンデルセンはその後、自らの類型論を発展させるのではなく、むしろ具体的に、女性が働きながら子育てできるような社会について、展望するようになりました。そのための政策として、男女共働きの奨励と、雇用条件の柔軟化を挙げています。男女ともに働いている場合には、どちらか一方が失業しても、家族としては安定した生活を維持できる。生活保護



に陥らない社会を築ける、安定した家族を築ける、という発想です。

でもこれを実際に行ってみるとどうなるのでしょうか。男女共働き社会においては、まずそもそも、同じような所得で結婚する可能性が高いですよね。例えば男性が大卒だと女性も大卒だと。低所得層が低所得層の人と結婚する可能性が高く、高所得層の人は高所得層の人と結婚する可能性が高くなります。そうすると、男女共働き社会では、当然、家計の所得格差が広がるわけですね。でもそれは容認せざるをえない。アンデルセンはむしろ、「格差」よりも「貧困」の方を克服しなければならないんだ、という形で論じています。格差は容認、市場の自由化も容認、ただ、雇用条件の柔軟化を促して、働きやすい社会を作り、貧困対策を重視する、というところに彼はいきつくわけですね。

## 北欧諸国を目指すなら、まずアメリカを目指せ

このように、北欧諸国の新自由主義化にともなって、規範的なモデルとしても、社会民主主義から新自由主義に移ってきたのではないか、ということが言えます。

そこで次に、もっと驚くべき事態について述べたいと思います。いろいろな指標を調べてみたのですが、単純化して言うと、もし私たち日本人が現在の北欧諸国を目指すとするならば、とてもアイロニカルなことに、まずアメリカ社会を目指さなければならない、ということなんです。北欧諸国を目指すなら、まずアメリカを目指せ」というスローガンが当てはまってしまふ。いったいどういうことなのか。以下に、いろいろな指標を見ていきましょう。

例えば、まず「1人当たりGDP」ですが、ノルウェー>アメリカ>スウェーデン>デンマーク>日本という具合に、順番を並べることができます。この場合には、北欧諸国とアメリカは、ほとんど同じ理想だということになります。

次に「人間開発指数」ですが、これは国連がつくったものですが、これも北欧とアメリカはほとんど同じような順位になっています。

第三に、「女性社会参加指数（ジェンダー・エンパワーメント・インデックス）」ですが、これについて北欧はずばぬけています。女性がエンパワーされている。ジェンダー・エンパワーメントというのは、男女の教育格差、男女の所得格差、女性国会議員の数、女性弁護士の数、女性公務員数を男女比で比較して算出するわけですが、この指標において、アメリカは17位、日本は57位なんです。ですから、ジェンダー・エンパワーメントで考えると、まず日本はアメリカを目指してから北欧を目指せ、ということになります。

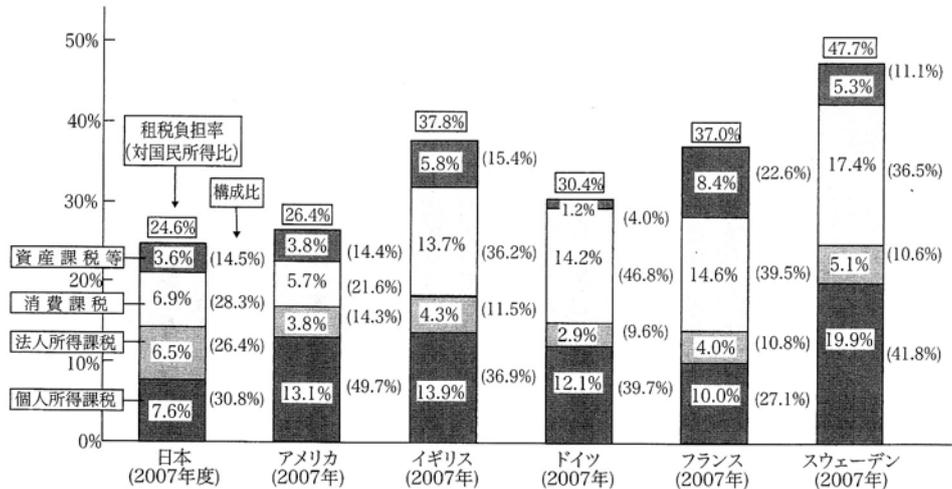
4番目の「国際競争力」ですが、これはさすがにアメリカが強いんですね。ですがそれでも、スウェーデン、フィンランド、デンマークは、日本よりも順位が高いんです。経済的な競争力を持っている。このようにみえてくると、北欧諸国を目指すならアメリカ並みに、あるいはアメリカを目指すなら、せめて北欧並みに、ということになります。

次の5番目からが決定的な話になってくるんですが、まず、租税負担率の内訳の図をご覧ください（図表4を参照）。日本が一番左側にあるんですが、その隣がアメリカ、そしてイギリスとなっています。

【図表4】租税負担率の内訳の国際比較（馬場義久「高福祉国家と消費税 第4章」『税務経理』2010年11月9日号、7頁、および、橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、144頁、参照。）



図表6 租税負担率の内訳の国際比較



(注) 1. 日本は平成19年度(2007年度)実績、諸外国は、OECD "Revenue Statistics 1965-2008"及び同 "National Accounts 1996-2007"等による。なお、日本の平成22年度(2010年度)予算ベースでは、租税負担率:21.5%、個人所得課税:7.2%、法人所得課税:3.4%、消費課税:7.1%、資産課税等:3.9%となっている。  
 2. 租税負担率は国税及び地方税の合計の数値である。また所得課税には資産性所得に対する課税を含む。  
 3. 四捨五入の関係上、各項目の数値の和が合計値と一致しないことがある。

そこでもし、日本が北欧諸国並みに租税負担率を高めようとする、まずアメリカやイギリス並みに租税負担率を上げないといけないんじゃないか。北欧を目指すんだとしたら、せめてアメリカやイギリス並みにしよう、ということなんですね。

6番目は「少子化」の話です。アメリカもスウェーデンも、両国とも少子化を防ぐことに成功しています。少子化対策については、アメリカもスウェーデンも目標になるということです。それから7番目に、「雇用全体に占める女性労働者の割合」というのがあるんですけど、これもどうも、フィンランド、カナダ、ノルウェー、スウェーデンにおいて、女性労働者の割合が多い。アメリカはそれよりも低い順位なので、日本で女性労働者の雇用を促進しようと思ったら、せめてまずアメリカ並みに、ということになるんですね。似たような指標として、第8に「セーブ・ザ・チルドレン」という団体が提供している女性指数に関しても、同じようなことが言えます。これはちょっと説明を省きます。

次に9番目ですが、「先進国における歳出に占める公共事業の割合」という図をご覧ください(図表5を参照)。公共投資の推移をみると、日本はどんどん減らしていることが分かるんですけど、アメリカとスウェーデンは、だいたい同じようなパーセンテージになっています。ということはということかと申しますと、私たちがかりに「大きな政府」を目指して歳出を増やそうとしても、スウェーデンのような北欧社会を目指すとしたら、歳出に占める公共事業の割合を減らすべきだ、ということなんですね。

【図表5】先進国における「歳出に占める公共事業の割合」の推移(井手英策「政府は信頼を作り出せるか」宮本太郎編『自由への問い2 社会保障』岩波書店、2010年、129頁、および、橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、146頁、参照。)

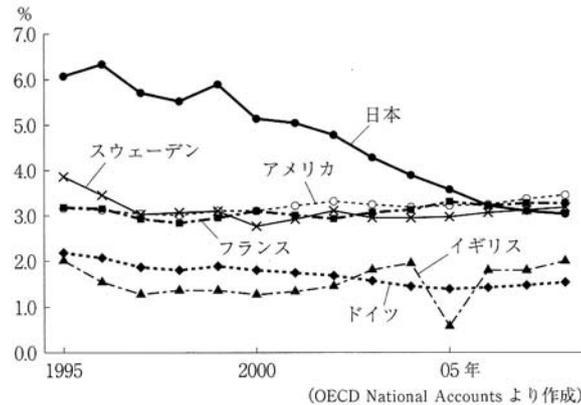


図2 先進国における公共投資の推移

10番目に、「失業者に対する公的職業訓練」について、その予算がGDPに占める割合を見てみましょう。日本とアメリカは、それぞれ0.03と0.04で、ほとんど職業訓練にお金を使っていないという指標ですが、ただそれでも、アメリカの方が少し多めに予算を費やしています。ですので、やはり職業訓練が大切なのであれば、まずアメリカを目指すべきだということになります。

11番目に、失業者のなかで、一年以上の長期失業者が占める割合についてですね。これは日本の場合、33%で、一番多いのです。この指標では、フィンランド>デンマーク>スウェーデン>アメリカ>ノルウェーという順になります。この点で、北欧社会をめざすとすれば、アメリカも同時に目標になるわけです。

12番目にいきまして、「企業の社会的貢献」指標でも、日本は順位が低く、アメリカも実は低くて、北欧を目指すべきということになるんですが、まずはアメリカを目指すことになるわけです。

そして13番目の「研究開発費の対GDP比」ですが、これを見ますと、フィンランドとスウェーデンははずばぬけています。これに対してアメリカはそうではないんです。他の北欧諸国もいろいろです。この場合には、国が予算を出すべきなのか、それともむしろもうすでに大企業で予算を十分使っているから十分なのか、という問題があるので、単純な結論を出すことはできないでしょう。

14番目はある意味でショッキングだったんですけども、「経済的自由」度の指標です。アメリカは経済的に自由な国だというのはいいんですが、順位ではその次にデンマーク、フィンランド、スウェーデン、日本、そしてノルウェーということになるんですね。デンマーク、フィンランド、スウェーデンというのは経済的にも自由な国なんだと。この指標を作っているヘリテージ財団というのは、アメリカのワシントンに拠点を置いている団体なのですが、日本よりも北欧諸国の方が、とくに金融の自由度や私有財産の保護といった点で開放的なんだ、と分析しています。

ということで、もしアメリカ的な経済的自由の国を目指そうという立場に立ったとしても、その場合にはまず北欧並みにという、アイロニカルなスローガンが当てはまってしまいうんですね。

最後に、「解雇法制の厳しさ」という指標をみてみましょう。労働者がどれだけ解雇されやすい社会かという問題です。たしかにアメリカは解雇されやすい社会で、北欧諸国は解雇されにくい社会だというのはその通りですね。日本はだいたいその中間くらいです。ただ実際には、解雇法制の是非をめぐって



は、同時に、企業のつぶれやすさ（市場原理の徹底）についてもあわせて考えなければなりません。企業がつぶれる確率は北欧でも高いですから、解雇されないけれども、企業がつぶれることによって失業する確率が高いということになる。そうなる問題はこういうことになるんですね。失業者を出さないために解雇法制を厳しくすべきなのか、と。北欧諸国では、むしろだめな会社はどんどんつぶして新しい会社に替えてしまえということなので、失業者を出さない政策が解雇法制を厳しくしろという話になるかという、そうならないんだということになります。

以上、15の指標についてみてきました。まとめですが、1人当たりのGDP、人間開発指標、女性の社会参加、国際競争、租税負担率、雇用に占める女性労働者の割合、女性指数、公的職業訓練費のGDPに対する割合、失業者に占める長期失業者の割合、および企業の社会的貢献度において、アメリカと北欧諸国は日本にとっては同じくらい魅力的なモデルを提供していて、北欧を目指すのだったらアメリカ並みに、あるいはアメリカを目指すのであれば北欧並みに、ということが言えるわけです。

もう1つの論点として、教育問題があります。最近になって、PISAという国際的な学力調査がなされていて、その成績でみると、フィンランドはずばぬけているんですね。フィンランドに学ぼう、学ぶべきだ、ということになるわけですが、実はフィンランドは、新自由主義的な教育で成功した、という報告があります。だとすると教育の理想としても、北欧は新自由主義なのではないかということになります。

ここで差し当たっての結論です。北欧の魅力ということですが、それは教育にせよ経済にせよ、それから女性の社会進出にせよ、いろいろな点で、新自由主義によって成功してきた点をわたくしたちは学ぼうとしているのではないかと、ということです。

そう申しまして、新自由主義というのは、悪いイメージがつきまわっていて、そんな新自由主義を目指すべきではない、という批判もあるでしょう。一つ紹介すると、例えば神野直彦さんは、次のように述べているんですね。「新自由主義とは人間を快樂と苦痛を一瞬のうちに計算するホモエコノミクスと想定するものであって、実際、新自由主義者たちは、個人の怠惰が貧困をもたらしているとか、格差や貧困は勤勉をもたらすインセンティブになるという考え方から、1999年の労働者促進法の改正や、その後の規制緩和政策などを推進してきた。新自由主義者たちは、他者と協力し分かち合うことなどあり得ない人間観に立脚しており、その観点からすれば、市場経済を拡大していく一方で、家族やコミュニティの機能の重要性を説くことは、どんな盾をも突き通す矛を売る楚の商人さながらの矛盾に陥ってしまう」、云々と。痛烈な批判ですね。ただこのような批判は、当たってないと思います。

新自由主義の代表的な思想家とされるハイエクは、「真の個人主義と偽りの個人主義」という有名な論文を書いています。コミュニティを大切にしない孤立した個人を重んじるタイプの間人間観は、フランス的な人間観であって、イギリス的な人間観ではない。ハイエクによれば、フランスの個人主義は「偽りの個人主義」であって、むしろイギリス型の、社会に埋め込まれた「真の個人主義」を目指さなければならない、というわけです。新自由主義は、国家にも個人にも還元されない「中間集団」を大切にしているんです。

もう1つ、サッチャーに対する誤解も正しておきたいと思います。イギリスの元首相マーガレット・サッチャーは、かつて「社会など存在しない、存在するのは男女とその家族だけだ」と発言したことがあります。中間集団の意義を否定するものとして受けとめられました。ところが『回顧録』のなかでサッチャーは、自分は誤解されたということを書いて、「私の言いたいことは、当時は明解であって



も、後で見る影もなくゆがめられてしまった」と言うんですね。サッチャーが言いたかったことは、「社会」というのは存在する。けれども「社会」と「国家」を区別すべきだ、ということです。中央集権的な国家に依存するのではなく、地方自治体や中間集団を利用して、諸々の問題に対応していくべきだ、ということなんです。

この主張は、ギデنزのいう「第三の道」と基本的に同じです。「第三の道」を政策理念としたブレア政権も、基本的にはサッチャーと共有した理念を持っていたということですね。ハイエクのいう「真の個人主義」とも矛盾しません。新自由主義というのは、国家に対しては批判的だけれども、社会の役割に期待する点に特徴がある。それは「第三の道」に継承されたと考えられるんですね。

となると、新自由主義といっても、いろいろな類型があるんじゃないか、ということになります。ここからの話は、新自由主義といっても、どういう新自由主義を問題にするのか、ということです。例えば、北欧型の新自由主義はいいのか悪いのか。あるいは現在の日本型の新自由主義はいいのか悪いのか。そういう議論をしてみたいと思うんです。

## 新自由主義の定義

そこで「新自由主義」の定義ということですが、基本的なものとして、1から6までの特徴を挙げてみました。まず「新自由主義」というのは、グローバル化によって生じた先進諸国、つまり福祉国家がある程度成功した国が、その次に選んでいる体制だということですね。ですから福祉国家以前の、資本主義経済がまだ発達していないところでは、たんなる自由主義とか、リバタリアンと呼んでいいということになります。新自由主義の「新」というのは「ネオ」なんですけれども、ネオというのは「次」ということで、あるいは「その後」ということで、成功した福祉国家をいかに改善するかという局面で現れた自由主義ということなんです。

第二の特徴は、結果としての不平等を容認する、ということです。第三の特徴は、公共サービスについて、貨幣原理や選択原理を導入しようとする姿勢です。第四に、新自由主義は、「大きな政府」でも構わないという考え方をとります。さらに第五に、構造改革を支持します。それは所得税よりも消費税を重視する改革ですね。それから第六に、ケインズ型の財政政策よりも、職業訓練などの積極的な労働市場政策を支持するでしょう。これらの六つが基本的な特徴です。

ただ、これだけだとまだ「大枠」にすぎません。次の表をご覧ください（図表6を参照）。政府規模からみた新自由主義の三類型です。もともと、従来型の福祉国家というのは、分配規模が大きくて、政府裁量の規模が大きいといえます。これに対して、分配規模は大きいけれども、政府裁量は小さいというタイプがあります。これはどういうことかという、課税を通じて強制的にお金を再分配するだけで、それ以外の行政サービスはあまりしないような政府です。第三に、分配規模が小さい場合でも、政府裁量が大きいケースがあります。古典的な自由主義においては、小さな政府で、分配規模も小さいです。でもそうじゃなくて、所得の再分配はあまりしないけれども、貧困対策はしますよ、あるいは職業訓練はしますよ、というタイプの政府は、政府の裁量が大きいといえます。新自由主義には、これらの3つのモデルがあります。この分類枠組においては、従来型福祉国家以外のものは、すべて新自由主義と呼ぶことができるんですね。かなり幅が出てきたということです。



【図表6】政府規模からみた新自由主義の三類型（橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、158頁、参照。）

	分配規模大	分配規模小
政府裁量大	従来型福祉国家	貧困対策・職業訓練社会
政府裁量小	普遍的新自由主義	古典的自由主義

さらに労働条件の観点から、新自由主義の特徴を見てみましょう（図表7を参照）。従来の日本のシステムは、解雇規制が厳しく、年功賃金制をとってきましたが、それ以外の三つのタイプはすべて「新自由主義」だと言えます。まず「ヨーロッパ型」ですが、これは職務賃金制で、年功序列制をとりませんので、ある職業に就いたら、若いときはわりとそれなりにもらえたとしても、歳をとってからはそんなに賃金が上がらないというフラットな賃金体系です。これに対して、年功賃金制を残した上で、解雇規制を緩和していこうというのが、「日本的改革型」のモデルとされます。第三に、職務賃金で解雇規制を弱めるというモデルですが、「個人主義労働市場」モデルと呼ぶことができます。これら三つのモデルに照らして、では既成労組のどこが問題なのか、あるいはどの類型が一番いいのか、ということが争われることになるかと思えます。

【図表7】労働条件からみた新自由主義の三類型（橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、159頁、参照。）

	解雇規制大	解雇規制小
職務賃金	ヨーロッパ型	個人主義労働市場
年功賃金	既成労組	日本的改革型

もう1つ、家族形態と政府規模の関係について考えてみましょう。これは北欧と日本とでは全然違うモデルになるんですね。北欧やイギリスは、「共働き家族」で「政府規模」が大きい。これに対して日本は、あまり共働きをしない「保守家族」で「政府規模」が小さい。スペインやアメリカも日本と同様です。それに対して政府の規模が大きくて保守的な家族形態をとっている国は、ドイツです。それから、共働きをしているところで新自由主義を導入しているのは、カナダです。こういった違いがありまして、これらのどれを目指すべきなのかということが問題になります。

最後の分類として、祭司型／普遍型の区別と、開発主義／非開発主義という区別を用いて、新自由主義を捉えてみましょう（図表8を参照）。従来の福祉国家は、政府主導の、あるいは護送船団方式による、開発独裁を行ってきました。これに対して、開発の要素を残しながら、政府が普遍的な仕方で、祭司型とは区別される仕方で、制度設計をする立場を考えることができます。アマルティア・センが言うような潜在能力開発型、具体的には職業訓練ということになるんですが、そういった開発に重心を動かしていくようなモデルが1つあります。これに対して、祭司型の政府でも、あまり政府が開発しない立場は、これを古典的自由主義と呼ぶことができるでしょう。あるいはこの古典的自由主義にプラスアルファして、地域共同体を重視するコミュニタリアニズムをモデルに加えることができます。第三に、開発主義



を否定するリベラリズムの立場ですが、これは普遍型の非開発主義として分類されるでしょう。従来型の福祉国家とは区別されるこれらの3つのモデルは、じつはすべて「新自由主義」と呼ばれているんですね。ですので、ここでも私たちは、どれかを選ばなければなりません。

【図表8】開発志向と普遍志向の関係（橋本努『ロスト近代』弘文堂、2012年、162頁、参照。）

	祭司型	普遍型
開発主義	祭司型設計主義 従来型福祉国家	成長論的自由主義 潜在能力開発主義
非開発主義	古典的自由主義＋ 地域共同体主義	普遍的非開発主義 リベラリズム

以上、さまざまな分類を試みてきましたが、差し当たってここで前半の結論として、これらの分類から、「北欧型新自由主義」を特徴づけてみましょう。1から10までの特徴があります。まず新自由主義の基本前提として、(1)先進国前提、(2)結果不平等容認、(3)貨幣原理・選択原理の導入、(4)大きな政府容認、があります。これらに加えて、(5)構造改革、つまり消費税増税、所得税減税の立場をとります。それから(6)積極的な労働市場政策、これはすなわち職業訓練を志向する立場です。さらに(7)普遍的な新自由主義ということで、市場ベースの社会で貧困対策を重視するという考え方をとります。第八に、(8)個人主義労働市場ということで、年功序列ではなくて職務賃金を志向します。それから解雇規制も緩和します。これはつまり、現在の北欧諸国がそういった方向に向かっているということですね。第九に、(9)共働きを奨励して、しかも政府規模は拡大、大きいまま保っていこうという形をとります。最後に、「成長論的な自由主義」、すなわち、アマルティア・セン的な潜在能力開発主義の立場をとります。これはつまり、基本的には職業訓練政策がコアになっているんですが、あるいはR&Dということで、経済の開発や人材の開発にお金を回していこうという、戦略的な立場です。

こうした九つの特徴が、北欧型の新自由主義のモデルになるでしょう。はたしてこれが望ましいモデルなのかということが問題です。

まず宮本太郎さんと神野直彦さんの共同論文で、「格差社会を超えるために」というものがあります。マニフェストとしての性格をもつ重要な論文です。いろいろあるんですが、基本的には最初の項目が重要ですね。ジニ係数とか相対的貧困率を下げるべきだ、ということが目標として掲げられていますが、問題はそのため的手段として、出産や育児の支援、あるいは就労支援などを掲げているんですね。具体的には、子ども手当とか職業訓練を支援することになるわけですが、ただ、この2つの政策を実行した場合に、相対的貧困率が下がるのでしょうか。またジニ係数が改善するのでしょうか。その他もこの論文には、いろいろな政策が掲げられているんですけども、では掲げられたことを全部実行したとして、実際に相対的貧困率が下がり、ジニ係数が改善されたとして、それは新自由主義を否定したことになるのでしょうか。

新自由主義の立場に立つ八代尚宏さんの提言をみてみましょう。例えば正社員と非正社員の間の賃金をすべて同じにしようべきだという提案があります。それから、やはり中間層よりも生活保護等を低所得層に十分な所得移転をしようという提案があります。それから夫婦共働きの促進です。いろいろ



あるのですが、比較してみると、宮本＝神野の政策パッケージ案と、八代のそれは、ほとんど同じ政策なのではないか、驚くほど似ているんですね。とくに次の3つです。まずミニマムな保障の強化。ですから、中間大衆を照準にした政策ではないんです。神野さんと宮本さんの改革も結局、政策としては、ジニ係数とか、あるいは相対的貧困率を改善するかどうかが怪しいようにみえます。第二に、エンプロイアビリティの強化。第三に、男女共働き社会の実現です。

一番の違いは何かというと、消費税増税に対する是非ですね。神野＝宮本論文は消費税反対の立場です。けれども北欧型を理想とするなら、北欧型の社会は消費税を増税して所得税や法人税を下げたわけですから、もし本当に北欧型自体が望ましいのであれば、やっぱり消費税を上げることに賛成すべきではないかと思うんですけれども。どうも日本の左派の論陣の張り方は、北欧に学べと言いながら、消費税を上げることだけ学ばないということになっています。立場を一貫させるならば、基本的には八代さんと同じように、消費税を上げるという論陣の張り方になるのではないかと思います。

ここで一つ補うと、「北欧型新自由主義」のモデルでは、解雇規制が大きい小さいかということ、あまり大きな差異にはならないでしょう。解雇されやすい社会でも、職業訓練をできるだけ手厚くするならば、雇用を守ることができます。北欧型は、解雇規制を中庸にして、積極的な労働市場政策を推進する立場だといえます。

もう1つ、職務賃金か年功序列か、という区別についてですが、いずれの賃金体系をとった場合でも、非正規雇用労働者になった場合のリスクがあります。そこで「メンバーシップ」といって、非正規雇用でも一定の賃金を得られるようにする、あるいは経営に参加できるようにする、というモデルを考えられます。このようなモデルを北欧型のモデル（理想）に加えることができるでしょう。

ですから、どうも私が見るところ、日本でいま議論になっている「新自由主義」の批判者も支持者も、同じような理想を掲げている。「北欧型新自由主義」という体制モデルを訴えているのではないのか。それが私の疑問というか、指摘なんです。

### 「北欧型新自由主義」とミクロの権力

もちろん「北欧型新自由主義」のモデルをもう少し考えた場合に、それは理想ではないという議論もあるでしょう。

これまでミッシェル・フーコー的な左派の立場は、ミクロな規律訓練権力を政府が行使することに対して、批判の矢を向けてきました。政府は基本的に年金とか福祉サービスとか、あるいは教育サービスとか育児サービスといった、人々のミクロの権力にかかわることにいちいち手を出すべきではないんだと。それはミクロの自立訓練権力とか、あるいは祭司型の権力に、人々を巻き込んでいくことになる。だから政府はお金だけ分配して、あとは手を引けというのがフーコー的な1つの理想です。そのための一つの政策として、ベーシックインカムがあります。各人のプライベートにはいっさい介入しないで、すべての人に一定の基本所得を与える、という福祉サービスです。これはある意味で、北欧型の普遍主義的な福祉をモデルとしているでしょう。

ところが今、北欧が変化してきた。フランスでもこのフーコー型の議論に対して批判が出てきて、最近の論議としては、ロザンヴァロン主張があります。彼はフーコー的な理想に抗して、各人の事情に応じたきめの細かいケアが必要ではないか、と考えます。ロザンヴァロンはとくに「社会権」の新しい解釈を出して、これはどういう権利なのかということ、これまでたんに、失業したら国家から



お金を引き出すという、保障の引き出しの権利というふうに解釈されていたわけですが、そうではなくて、彼は次のように解釈するんですね。

「人間が闘ってきたのは、保護者として人々を気遣う福祉国家によって衣食住を与えられる権利のためにはない。自らの労働によって生活する権利、自ら得る収入を社会における職能に由来する承認に結び付ける権利のために闘ってきたのである」と。

これはつまり、社会権というのは、失業した場合に、お金をもらって保障してもらおうのではなくて、仕事を提供してもらおう、あるいは仕事に就けるように訓練してもらおう、ということですね。それが社会権の本来の要求なんだと。フランスでは失業率が高いわけですが、どうして失業率が下がらないのかというと、どうも失業者にはさまざまな生活背景があって、失業が続くことを説明する変数がいろいろある。例えば同じフリーターでも、親元で暮らしている人と、親元を離れて暮らしている人の場合とでは、ずいぶん生活水準が異なるでしょう。年収が同じ 80 万円でも、個人個人のライフヒストリーを見ていかないとの確な対応ができない。つまり政府は、各人のプライバシーに介入して、きめの細かい福祉サービスを提供しないと、「社会権」を保障できないんですね。

この場合、マクロ的な統計データは、あまり参考になりません。むしろ各人のライフヒストリーを調べるといって社会学の手法が役立ちます。ロサンヴァロンはこれを、まさに研究のパラダイム・チェンジみたいに言うわけですが、ライフヒストリーを把握するためには、例えば移動性とか、労働契約の類型とか、あるいは職業活動停止の回数とか、それぞれの家族構造、両親が離婚しているかどうかといった一般的な事柄だけでなく、心理学的な個人史が重要になります。例えば、大学を中退しているかどうかとか、兄弟の数とか、父親の職業とか、気質的な疾患といったものです。これらをすべてプロファイルしていかないとの確なアドバイスができない、サービスが提供できない。こういったプライベートな個人史に踏み込んで、政策を行うかどうかですね。

## 「チャイルド・トラスト・ファンド」

北欧型新自由主義の第 10 番目（最後）の特徴として、先に「成長論的な自由主義」、すなわち、アマルティア・セン的な潜在能力開発主義を挙げました。具体的には、職業訓練政策や R&D などの政策です。「チャイルド・トラスト・ファンド（子供信託基金）」という政策も、この特徴の一つとして挙げる事ができるでしょう。子供のために政府が金を積み立ててあげて、例えば子供が 20 歳になったときに、最初の資金として銀行から引き出せるようにしよう、という制度です。日本ではこの「チャイルド」を「子供」と呼ぶのか「児童」と呼ぶのかという争いがある、結局「児童」に戻ってしまったわけですが、

この政策は、イギリスでは、労働党が率先してやりましたが、いまは廃止の方向に向かっています。ただその背後にある考え方は重要です。というのも従来の福祉政策においては、福祉を提供する際に、所得を再分配するか、あるいは公共サービスを提供するか、そのどちらかを用いることが支配的だったんですが、「子供信託基金」というのはどちらでもないんですね。これは資産形成に対して温情的な介入をしようという資産型の福祉政策なんです。「第 3 の手段」とも言われるんですけども、過去に歴史がいろいろとあって、いろいろな提案がなされてきました。

似たような政策として、アメリカのブッシュ政権がやった「オーナーシップ社会構想」があります。どういうものかということ、誰もが持ち家を持てるように、資産形成のためのローンを優遇する、といっ



た福祉政策なんですね。これは資産形成を支援する第3の手段です。ところが結局、この政策はファニーメイとかいくつかの住宅金融銀行が破綻して、結局リーマンショックにいたるわけですが、そのローンのリスクが欧州を巻き込んだ形で、それがグローバリズムの中で新自由主義全体を一度ダウンさせてしまったということがあります。

おそらく政府がオーナーシップ政策を行わなければ、つまり住宅ローンがこれだけリスクの多い形で金融資産として売り買いされてなかったら、リーマンショックは避けることができたかもしれません。

いずれにせよ、ここで理念としては、誰もが資産を持てる社会が望ましい福祉国家なのであるという考え方です。これは「子供信託基金」にしても、「オーナーシップ社会構想」にしても同じなんですね。日本もこうした政策をどこまで導入できるかということが議論されるんですが、この議論の面白さというのは、福祉政策が持っている思想的なインプリケーションにあります。およそ10個程度の含意があると思うんですけれども、以下、いくつか紹介します。

まず1つは、アマルティア・セン的な潜在能力の活性化。資産を持つことによって、それ自体、自由に活動できるという潜在能力を刺激するわけですね。あるいは人々の未来志向を強化する。自分がこれからどうしたいのかについて、人々はいつそう自覚的に考えるようになるので、資産形成も高まるだろうし、お金を使う人も増えるだろうということです。

第2に、人々の金融能力が上昇するというところで、これは金融関係者にとって朗報となります。それから第3に、機会の実質的な平等化ですね。平等主義の理念を体現しています。第4に、世代間の連帯ということで、これは政府を通じて子供に資産を移転するわけですから、世代間の連帯を高めます。第5に、少子化対策にも資するでしょう。他にもいろいろありますが、これは政策理念のパッケージとして、右からも左からもいいところがありますよ、という形になるんだと思うんですね。

そうなってくると「子供信託基金」というのは、右か左かというのではなくて、むしろ福祉政策を資産型に変えるという方向性を持っている。資産形成が発達すれば、そこからローンを組むこともできる。あるいはライフプランを立てるよう促すことができる、自立できるようになる、といった派生効果が生まれます。こうした新しい資産型の福祉政策を、「北欧型新自由主義」は含みもっている、ということができるでしょう。潜在能力を高めて人々のスキルアップをはかるという考え方は、北欧型新自由主義の一つの魅力と言えるかもしれません。この資産形成型の福祉政策を練り上げていくことは、「北欧型新自由主義」の今後の課題になるでしょう。

以上が私の報告です。ご清聴、どうもありがとうございました。

(司会) どうもありがとうございました。今日は今までの常識を覆すようなすごく幅広いお話をしていただきまして、どうもありがとうございます。最初にも言いましたが、北欧というのはいわゆる福祉国家のイメージがありますが、実は今はかなり変わってきている。新自由主義的な方向に向かっているというお話が最初にあって、その新自由主義が実はいったいどういうものかと概念として整理をするということで、実態を把握すると。

その次に、じゃあ、北欧の新自由主義はどういうタイプの新自由主義になるのかということで、先生のお言葉で言えば、積極的な労働市場政策ということで、ただ失業者に金を渡すということではなくて、再雇用されるような訓練をしてモチベーションを高めて、やる気を出させて雇用市場に戻ってこられるようにする。そういう形の福祉政策などを含んでいると。



それは例えば、統計的に失業者が10万人いるからただ一律に配分するというのではなくて、個々の事情に合わせて政府の方がきちっときめ細かい配慮をして、政策配分をするということですね。

だからメッセージとしては、個々の潜在能力を活性化する、平たく言えばやる気を出させる福祉政策というんですかね。最後の具体的な提言としては、資産型の福祉政策というものを紹介していただきました。それがこれからの目指す新自由主義であり、福祉の形であるのではないかという議論でして、これまで、今テレビとかでいろいろ議論されていますが、その前提を覆すようなお話をいただいたのではないかと思います。

(Q) どうもありがとうございます。私も不勉強なものですから、今日は非常に楽しい話を聞かせていただいて、非常にためになりました。3点ほどコメントと質問があるんですけども、1つは人口の問題ですけど、最初のページに書いてあるように、北欧というのはやっぱり人口が少ないわけですよね。ですから極端に言うと、例えばフィンランドなんかは北海道よりも小さいくらいの人口しかなくて、そうすると中央と地方の関係の問題とか、そういう大国が抱えている、数千万人の人口を持っている国が抱えているような問題というのは一切ないわけですよね。

そのことは、財政とかいろいろな問題を考える上で非常に大きいんじゃないかなという気がして、その点を考えると、北欧モデルというような言い方で通用するのかなということについて若干疑問を持つところがあるんですけども、その辺は何か議論があるのかなというのが1点目です。

それから2点目は、やっぱり人口なんですけれども、少子化が食い止められていて生産人口は減っていないという話はあるんですけども、しかし北欧の人口がどんどん増えているという印象はあんまりないですよね。私、それも不勉強でちょっとよく知らないんですけども、長期的に見てもあんまり増えているように思えないので、そのあたりはどういうことなのかなというのが2点目ですね。

それから3つ目は本当に単なる質問ですけど、国際競争力という指標が出てきましたけど、これは具体的にはどういうもので測っているのかということをお教えいただきたいです。

(橋本) ありがとうございます。人口の問題は一般によくいわれる話で、大国が抱える問題がないのでやりやすいだろうと。その通りなんです。ですから、結局、最初に言いましたように、日本はアメリカほど人口が多くないので、目指すべきはイギリスかドイツではないか、という議論になりますね。これまでも福祉政策については、これらの国から学ぶということになっていましたね。

ところが、イギリスやフランス、あるいはドイツのモデルがどうも理想にならないときに、日本はどうするのかということだと思います。ある意味で、日本はそれだけ成功したということだと思うんですね。そうすると、小国のパフォーマンスのいいところからいい点を学ぼうということではないでしょうか。ですから、すべてを北欧から学ぶことができるわけではないというのは、おっしゃる通りだと思います。

けれども例えば、少子化対策がうまくいくかどうか、あるいは教育政策がうまくいくかどうかという点について、ある程度学べるところはあるんじゃないかと思いますね。けれども軍事的な面とか、あるいは政治的な面では、北欧は実はそれほど優位ではないかもしれません。経済的にみた場合には、北欧諸国にもいくつかの成功したグローバル企業があって、経済的にはそんなに小国扱いされていないところだと思います。



2 番目のご質問ですが、確におっしゃる通りで、北欧でやはり移民を増やした結果として、うまくいっている面といてない面があります。人口を増やす際に移民に頼ることに問題は残るでしょう。これに関して言うと、カナダではむしろ成功しているという話で、八代さんという新自由主義の論客なんですが、なぜカナダがモデルになるかという、少子化対策がうまくいって、共働き家族が実現している。共働きで経済成長して少子化を食い止めているという理想はカナダにあると言われます。もちろんアメリカでも、やはり確実に白人の人口が減っている。問題は北欧と変わらないんです。です、おっしゃる通りで、北欧から少子化対策について学べるのかというところは確かに疑問です。

国際競争力の指標は、すみません、今すぐにさっと具体的な指標を持ち合わせてないですが、例えばどれだけ企業が開発費をつぎ込んでいるとか、あるいは開発された技術を具体的に製品化しているかという点で、北欧は日本よりも優位に立っているといわれます。

(Q) このレジュメの4枚目の裏にあります表の4の1、アンデルセンによる福祉レジームの3類型、左が自由主義、右端が保守主義というふうに2つ交わっているんですけども、私の「保守」という言葉の理解がまったく逆だったんですね。社会主義国における保守と、資本主義国家における保守は、まったく立場が正反対だと私は習っていました。社会主義国においては計画経済の原理に対して保守、資本主義国家においては、市場経済の原理に対して保守。ということは、市場を開放するのかしないのかといった問題について、社会主義国であれば市場開放に対しては消極的になりますし、逆に資本主義国家においては市場開放は積極的に進めるというふうに、私はまったく逆だと思っていたんです。

そうすると、資本主義国家における保守主義と自由主義というのは、基本的には同じというふうに私は今まで解釈していたんですね。しかしこの表を見ますと、まったく別のものとして扱われているということで、私は今日初めてこれを見て驚いたんですけども、その点についてまず1つ。

2 目、消費税ですけども、日本は消費税が導入される前から低福祉低負担をやっていました。それに対して北欧は高福祉高負担というのをやっていて、消費税が導入されることによって、やや中負担中福祉というところに移行したといわれています。消費税の導入が決まったのが1988年12月の国会で、当時、自民党が強行採決して導入が決まったわけですけども、そのとき国民をなだめるために使った言葉の1つに、この消費税は福祉目的税にします、という言葉があったんですね。

ところがじゃあ、実際に本当に福祉目的税として限定されて使われているのかということ、実際にはそうはなっていません。そして消費税が導入されて、さらに3%から5%に引き上げられたことによって、目に見えるほど福祉政策が充実してきたのかとなったら、それを実感として感じている人はあまりいないんじゃないのかと。

では日本国民がなぜ消費税引き上げに反対するのか。それは払った分が確実に戻ってきているのか、自分たちにそれが恩恵として返ってきているのかという疑問があるんですね。つまり政府に対する信頼度が低いということ。

同じ問題で、北欧では日本なんかよりもはるかに消費税の比率が高いわけですけども、それに対して現地の国民はどういう態度を取っているのかということ。この2点についてお尋ねします。

(橋本) ありがとうございます。とてもいい質問だと思います。保守の理解についてはその通りだと思います。特にアメリカの場合、保守とリバタリアンというのは基本的に建国の理念に戻るとい主張



で、政府介入に否定的ですよ。もっと言うと、家族はプロテスタントのイメージなんですね。ところがこのアンデルセンの三類型は、ヨーロッパを中心に考えています。

(Q) じゃあ、国によって違うということですか。

(橋本) そうですね。あ、国というか、ヨーロッパ、特にヨーロッパのどの国というわけではないんですね。ただヨーロッパはその中間で保守という概念を使います。ですので、政府と市場のどちらが強いかというのが、保守の概念の中で特に明確な概念規定がないんですね。

(Q) 世界共通の保守の概念というのは。

(橋本) ないです。それは時代によっても変わりますし、ヨーロッパにおいても、何が保守かは時代によって変わるわけですね。例えば近代的なものに対して保守であれば、例えば民主化運動に対する反対とか、フランス革命に対する批判とか、いろいろあると思いますね。ですが、いま問題にしているのはアンデルセンの定義における「保守」なんですけれども、これはヨーロッパの国々とアメリカを比較するなかで定義されたモデルです。すると国家にも市場にも頼らない、近代以前から存在した家族・近隣関係のようなものを重視する立場を「保守」とみなしているわけです。

2番目の質問ですけれども、消費税の話はまさに日本の政府に対する信頼度が低いという点ですね。これはいろいろなアンケートや世論調査から示されていますね。つまり、国際比較では、日本人は政府も信用してないし、市場も信用してないということになるんですよ。これに対してアメリカと北欧諸国は、市場も政府と同じくらい信用するというので、真逆になっているんですね。

私たちはなんで消費税に反対しているのかと申しますと、国民の意識として、例えば家族とか地域とか、あるいは地方自治でもいいんですが、そういったものにコミットメントを示していて、国家を信用していない点に原因がある。ですから、すぐに北欧型のようにはうまくいかないんですね。

それから、福祉の充実化に実感がないとおっしゃいましたが、まず確認したいこととして、80年代に新自由主義が席卷して、福祉関連の予算が減ったのかということ、そんなことはありません。また、一般財源に対する福祉関連予算の割合も増えていて、ただその伸び率が0.1%くらい減ったということですね。予算としては充実している。高齢者にとっては、福祉の充実化は実感があるんじゃないかと思えますね。年金をそれだけもらっているという。ただ、まだその年齢に至ってない我々としては、まったく還元されてないということです。というふうに私は感じるんですけれども、お答えになっていますか。

(Q) どうもありがとうございました。専門家ではないんですけれども、この話は非常に個人的に興味があるので、今回ちょっと久しぶりに頭を働かせていただきました。「北欧型新自由主義」ということで、資産形成に重点を置くということなんですけれども、最近例えば市場とか金融に対する、バブルを含めて、疑問が出ているのではないかなと1つ思っていたんですね。

ついこの間、日経に世界価値観調査というのが出ていまして、慶應大学の鶴光太郎さんですけれども、福祉と人への信頼度、あと文化、その国の文化によって非常に左右されるということが書かれているんですけれども、これに対してどう思われているのかというのをちょっとお聞きしたいなと思ったのと、



もう1つは「北欧型新自由主義」ということで、女性の立場、社会進出、共働きが重視されているということですが、確かに女性の立場としては、万年失業者であってモチベーションもあまり上がっていないということは常々感じているんですけど、これは本当に専門的じゃなくて個人的で申し訳ないんですけど、先生は奥さんの共稼ぎに関してはどういうふう考えられているかちょっとお聞きしてみたいなと。よろしくお願いします。

(橋本) はい、分かりました。最初の質問がまだちょっと分かってないんですけど、福祉の信頼度ですが、国によって違うということで、質問の趣旨は、それに対してどう思うかということですか。

(Q) ええ、これはいわゆる社会保障と税の一体改革というグラフには、他人の信頼度と福祉の規模が相関していると。それで、移民の文化を含めて、もとの自分の、本人とか親の出身国の文化との関係ですね。他人の信頼度とか社会とのこと。その価値観というのが非常に……

(橋本) はい。信頼というのはいろいろな世界の調査がありまして、アメリカは例えばフランシス・フクヤマが出している『信頼』という本、日本語は『「信」無くば立たず』という題で出している本ですが、そこでは、アメリカよりも日本の方が高信頼型社会じゃないかという一般的な先入観が当てはまらなくて、アメリカもかなり信頼のある社会だという評価をしていますね。福祉国家ではないアメリカでも、信頼関係は発達している。信頼はその場合、経済成長率とか経済発展ということに関係するわけですが、信頼度が高まった国の方が経済が発展するといった話もあります。

ですから一概には言えなくて、もう少し検討しなければならない。私自身、まだ検討してない点です。かりに政府の福祉政策に対する信頼が高まるとしても、中間集団の紐帯を壊してしまうのであれば、例えば離婚率を上昇させてしまうことがあるかもしれません。国家に対する信頼は、個人の孤立化と並行して生じるかもしれません。もっとも北欧社会というのは、規模が小さいので、国家と中間集団(社会)のあいだにあまり距離がありませんが。

ただ今日の発表では、「福祉」ということの意味を考えたいんですね。たんに再分配をするのではなくて、資産に注目した福祉のあり方を考える。それによってどれだけ社会がよくなるかということですね。その場合の「信頼」の意味を突き詰めていきますと、子供に夢を託す社会ということなんですね。

チャイルド・トラスト・ファンドのように、私たちが子供たちになるべく期待していくというような形で、福祉の財源を運営していくかどうか、ですね。それはその世代間の連帯だけじゃなくて、ナショナルな意味でも、我々が国民としての一体感、連帯感を高めることに資すると思うんですが、いかがでしょう。

これに対して、福祉というものを、一人一人の個人のウェルフェアと考えて、予算をばらまくとなってくると、それはそんなに理想的な社会に見えませんね。ですから、争っていることは福祉の内実です。どういう福祉政策をやるべきなのかということなんですね。その場合は、ある程度大きな政府を前提としています。さらにそういった議論をすべきなんじゃないかというのが私の考え方です。

もう1つ、女性の共働きについてですが、地域に貢献する仕事の多くは、ほとんどお金になりませんよね。町内会活動にしても、PTA活動にしても、コミュニティ・スクールにしても図書館ボランティアにしても、コミュニティ・カフェにしても、あるいはコミュニティ・ラジオにしても、ほとんどがボラン



ティアです。そのような活動の担い手がいなければ、地域社会は魅力的なものにならないんですね。このような活動も含めて、共働きの一つの形態として捉えることもできるでしょう。

ただ万年失業者のようだと今おっしゃいましたけれども、女性の雇用機会が少ないかと言えば、地域によっては必ずしもそうではない。ただ多くの人は、仕事を選びますし、働く地域も選びます。ですから労働市場の需給のマッチングがうまくいっていないということはいえるでしょう。

北欧型新自由主義ということで、次世代に夢を託す点に特徴があるとすれば、問題は、生まれた子どもの資産形成のみならず、働かずに子供をたくさん育てることのインセンティブがなければなりません。女性にとって究極的な選択問題の一つは、例えば子供を生まずに高所得を得る仕事を続けるのか、それとも専業主婦となって多くの子供を育てるのか、いずれの選択が結果として国家に多くの税金を納めることになるのか、あるいは国家のためになるのか、というものです。これは問題を提起するにとどめたいと思います。

(Q) 今の北欧の状況を教えていただきありがとうございます。今の最後のところの資産を基にしたというところでちょっとお伺いしたんですけども、この中にもちょっと話が出てきましたけれども、移民労働者をどう考えるかというところで、橋本さんのモデルというのは基本的に閉鎖的な労働市場を前提とした話と考えていいんでしょうかということと、それからドイツとかイギリスとか、イギリスの場合はかなり労働市場を開放しているので、そういうのもモデルにならないということでもあるかもしれないけれども、日本も結局労働市場を開放せざるを得ないというときには、移民労働者も家族持ちで来るような移民労働者を前提にして、つまり出稼ぎではなくて、あくまでも移民して定着して、そこで家族を形成するような移民労働者ならば受け入れるけれども、そうじゃない出稼ぎ型の者はやっぱり排除すべきではないかという話になってくるんでしょうか。

(橋本) ありがとうございます。今日の議論の盲点ですね。結論から申し上げますと、それに対する私の考え方はあいまいで、ないんですね。ただ、移民を受け入れた場合に、より北欧的なというか、資産型の福祉社会になるわけではないので、移民の問題が抜け落ちているということです。ただ実は私は、以前に出した本『帝国の条件』で書いたのですが、難民を受け入れる日本社会の構想ということで、1つモデルとしてつくっていますけれども、今回の話には関連しませんでした。非常にいい指摘だと思います。

(Q) 今日はお話をありがとうございました。楽しみにして来たので、すごくいいお話だったと思っています。何というか、すごく大きな広がりがあるお話だったので、質問をする上においては、ケインズ主義的な観点から質問をするのか否かとか、19世紀的な自由競争における観点から質問するのかとか、あるいは北欧地域研究者として、北欧地域研究からの視点でご質問をするのかとか、あるいは北欧といってもいろいろ、スウェーデン、フィンランドとたくさんあるので、そういった各国の研究をしている人からすれば、またそれはそれなりのそういう質問があるのかなと。

いろいろ質問があると思うんですけど、少なくとももちろん僕が言うまでもなく、とはいえ、今日はあんまりそこら辺の指摘がされてなかったんですけど、これは北欧研究うんぬんといった文脈からではなくて、もうこの『ロスト近代』という本の中の1章の、ロスト近代という時代における「駆動因」を



探るんだという議論の中の北欧型新自由主義というお話だったと思うので、そういった話を考えていくと、自分として面白かったのは、それこそ北欧福祉国家というのと新自由主義の結び付きといったものが、これまでのフレームワークというか、成功した福祉国家と市場原理社会という構図である程度うまく説明することができないと。

そういう中でどうするかというと、国家も市場も重視していくような成功した福祉国家と市場原理社会の組み合わせみたいなものが現象としてあって、それが新自由主義というそれ自体の定義の刷新みたいなところへとつながって行って、大きな政府に適合したような新自由主義みたいな話になっていくと思うんです。

最終的には北欧型新自由主義というのは、福祉国家をめぐる論争を収れんさせていくような実効性のあるものであるんだ、という話になったと思うんですけど、一歩開いて言うと、北欧地域研究者の中からすると、北欧型社会が新自由主義化しているというのはそんなに真新しい話ではないような気もしていて、大きな政府でありつつも、新自由主義的な手法を取るというのは、1990年代における社会民主党のときからもう始まっていたし、それが2001年に政権交代して、左翼党と保守党の連立政権になってから以降、加速度的にそういった新自由主義化みたいなものが推し進められていったというのは、結構共通認識というか、合意の部分だと思うので、そこら辺の質的な部分もいろいろあったりして、とはいえ、それは一番最初に言ったように、これは北欧研究うんぬんの話ではないんだという話もあると思うので、そこら辺は置いておくとして、その上で2つほど簡単に質問があるんですけど。

ここの議論で言うところの潜在性とか潜在力とか、一般市民と住民の潜在力とか潜在性みたいなものがキーであるとするならば、先生も引用されていたアマルティア・センのケイパビリティ・アプローチとの本質的な差異みたいなものというのは、北欧型新自由主義なんだ、とか、これが第3の道じゃなくて第4の道なんだ、と打ち上げて見ることによって、今までのケイパビリティ・アプローチからでは見えてこなかったような視点というのはどういったところがあるのか。もちろんアプローチと主義といったものの違いもあると思うんですけど、そういった点を自分としては教えてもらいたいというのが1点目です。

2つ目は、この本というか論文の中にも出てきた、おのおのの事情に応じた温情的な政策と言ったときの「おのおの」というのは、いったいどういった人たちを指しているのかなと。先ほど移民とか難民の話も出ていたと思うんですけど、2001年の政権交代を経て、少なくともデンマークの文脈だと、できるだけ普通の国になっていこうとしていた10年間だったとっていて、北欧社会全体で言えるかどうか分からないんですけど、少なくとも今までのように、世界が抱えている問題みたいなものの受け皿としての北欧というのはもうあり得なくて、少なくとも自分たちと彼らの線引きというか、境界線みたいなものをはっきりさせていこうという動きの中で拡大協力として、していた右派の政党というのも、すごく影響力を政治の中に持ってきたとありますが、そういったときにフーコー的な意味でのミクロな部分に権力が介入していくというのはもはや時代遅れというか、繁栄してなくて、そういった部分に影響力を行使していかなければいけないんだという議論と、本当のというか、分からないですけど、実態としての北欧社会で起こっている動きとの関係性というか相関性みたいなものはどういうふうに説明されますか、というのが2つ目の質問です。以上です。

(橋本) ありがとうございます。非常にクルーシヤルな質問だと思います。最後の方のご質問から先



にお答えしますと、私は地域研究者にはもっといろいろ教えていただきたいなと思っておりまして、いま実態として北欧が新自由主義化している点について、どうしてそれを報告する論文をだれも書かないのか、ということです。どうも何かバイアスがあった論文ばかり読まされているという気がするんですね。だから若い研究者にはぜひもっといろいろ実態を報告していただけるように期待するところはあるんですけども。最近でこそ、朝日新聞でも北欧が新自由主義化していることが指摘されるようになりましたが。

次に、北欧型新自由主義とセンの大きな違いというのは、センの場合には、「ファンクショニング」という言葉があります。それはある福祉、ウェルフェアの機能している状態です。例えば図書館を使うために歩いていける、あるいは歩かなくてもアクセスできる。そういった、何か福祉を享受できることを、ファンクショニングが働いている状態と言いますね。それができる可能性を持っていることがケイパビリティと定義されているんですね。

ケイパビリティ・アプローチは、ファンクショニングを福祉国家の課題だとするんですね。センは具体的に述べていませんが、国や自治体のレベルで、まず必要なファンクショニングをリスト化してみて、それらを満たしていこうという話をするんですね。

ところが私はここで、ケイパビリティという概念ではなく、潜在能力という言い方をしているんですが、それを持つことによってどういうファンクショニングが生まれるかが未知である、という考え方をとるんですね。資産すなわちアセットというのは、そういうものであると。それを使って何をしてもいい、そこに新しい可能性が生まれる、という話になるんですね。どういうファンクショニングが可能になるかを、特定する必要がない。ただ、ある程度は選択肢を出しておくことも必要でしょう。例えばその資産を大学教育に使ってくださいといった勧誘も必要でしょう。

でも基本的には、資産は、新しい可能性を伴うんですね。若い人が、新たな仕方での自分の潜在能力に気付いていただくということが、少なくともアマルティア・センの定義からは、根源的なレベルで新しいファンクショニングの可能性が出るケイパビリティというのは、概念的に規定されてないんですよ。そこが大きな問題で、私がセンに対して経済思想的に批判的なのはそこですね。

2 番目のお話ですが、非常に面白いご指摘で、デンマークが普通の国になってきた、という話だったんですけども、おっしゃるように、おそらく EU の枠の中でしか動けないということがあるんですね。ですので、特殊な政策が取れなくなってきたということが背景です。もう 1 つはグローバル化ということで、それに対応するために法人税を下げざるを得ないということですね。高率の所得税に関しても下げざるを得ないという前提があるということですね。

ですので、そういった政策はある程度仕方なくやったんだと思っています。今の北欧諸国の実態はどうなのか。いくつか新聞等、あるいは論文等で読むかぎりだと、福祉政策に納得してない層が報告されているわけです。格差が顕在化して、同じように不満が高まっている。反対に成功者たちが、それを容認する動きも増えてきたらと思う。仮にそうだとした場合に、北欧型のモデルというのは理想なのかと。検討しなければなりません。

1 点だけ申しますと、実はこういう批判があると思うんですね。職業訓練を実際にやって就職しても、その会社で 3 カ月後になっても就労している可能性がどれくらいあるのかということですね。スウェーデンでは実際に職業訓練を受けて就職しても、辞める可能性がかなり高いんです。やってもあまりうまくいっていない、という報告も出ていますね。日本のフリーター問題よりもかなり深刻だと。



その場合に、それでも職業訓練にお金を使うべきじゃないのかということが、今日の私の報告で一番クルーシカルな問題かもしれません。それはどうしてかということ、その人はある意味で社会的な不適応なのかもしれないし、いろいろな社会的な問題があるのかもしれないですけども、少なくとも職業訓練というプロセスの中で、コミュニティに巻き込まれていく。その中で連帯のコミュニケーションが生まれていくと期待できます。

それが福祉政策のある種の姿であって、失業者にたんにお金をあげるというのではなくて、地方分権化のもとで、人を孤立化させない人間関係の場として、潜在能力開発型の職業訓練コミュニティをつくっていく。それはあまり成功の見込みがないんだけど、それでもやるべきだという、非常にづらい決断になりますよね。どう取り組むかということが一番問題です。

(Q) 素人的な質問をさせていただきます。どうしても北欧を見習え、みたいなものを日本に導入しようという、何かロジスティックなことを考えてしまうんですけど、やっぱりものすごく大きな政府を維持するためには、最初の話に戻っちゃうんですけど、政府に対する信用というのは必要になってくると思うんですが、北欧で市場に対する信頼も高いし、政府に対する信頼も高い云々という話が先ほどあったと思うんですけども、その源泉はいったい何だったのかということをお聞きしたいと思っています。

それは例えばコーポラティズム的な政府だったから、ある種さまざまな利益を吸い取るようなメカニズムが機能していたからこそ、こういった移行が可能だったのか、あるいは日本というのは、この10年で日本の政府に対する信頼が失墜した大きな要因の1つは、やっぱり公務員の流動性がないというか、公務員になってしまうと終身雇用の路線にはまってしまって、何をやっても何となく稼げてしまうというものに対する不信感、少なくとも私はそういうのに対する不信感を持っているんですが、そういう現場を見てきたので(笑)。

まあ、それは置いておいて、だから私たちの公務員というものに対する信頼というのは、ある種公務員が流動するような仕組みになっているのか、あるいはそれ以外の要因かなということを知りたいと思います。

(橋本) 今の話は、公務員がある程度職場を変更できる場合に、信頼が高まるということですか。

(Q) 少なくとも出来の悪い人間はクビになるとか。分からないですけども。

(橋本) なるほど。そうですね、それは考えてみるに値しますね。いや、ちょっとそこについてはあんまり考えてなかったんですけども。最初の問題点は、なぜ北欧型の国家はそもそも信頼度が高いのかという、それは人口が少ないというのが1つの理由になると思いますね。人口規模で考えたら、それが1つの地方であるわけですね。

ただ歴史的に言いますと、1920年代のあたりで国家独占資本主義をある意味で作為的に避けることができたのは北欧諸国なんですね。ですから、そこでは国家が大企業と結託する形で労働者を搾取するというメカニズムが生まれなくて、むしろ国家がそういった独占を禁止しますから、資本主義の競争メカニズムが作用するように、作為な制度条件が作られたんですね。自然独占を排して健全な競争メカニズ



ムが働いたと。

つまり、北欧諸国は、大企業に牛耳られない健全な市場の可能性を示した。それはまだ福祉国家ができる以前にすでにそういったことができていた、という話なんですね。そこら辺からずいぶん違いが出てきているんじゃないかと思います。話はもっといろいろあって、その後、例えばスウェーデンの社会民主党が1962年に「自由選択社会」といった政策を打ち出して、政府と市場の両方に信頼を与えていく、ということもあります。

もう1つ、今おっしゃっていただいた公務員に対する不信というのは、北海道から見るとそうですね。でも東京に行くと公務員の給与は相対的に低いです。だから正反対の印象を持つかもしれませんね。印象論になって恐縮ですけども、かりに公務員をもっと辞めさせて、例えば教員にしても、不適合な人にもすごい退職金を与えて人材流動化するという形を取った場合、それは私も賛成ですが、その方が公務員に対する信頼も高まるでしょう。

いま1つは、最近、公務員試験で面接の比重が高まってきたというのは朗報ですね。しっかりコミュニケーションできない人は、そもそも公務員になれないということで、コミュニケーション能力の向上が、公務員に対する信頼を高めることに資するかもしれません。

(司会) ありがとうございます。時間がもう過ぎていきますので、申し訳ないんですが、この辺で終了とさせていただきたいと思います。今日のお話はいろいろな議論の前提を覆すということで、例えば政治的に左と右の人たちが、論争していても実は同じことを言っていたり、あるいは、例を出すと悪いですが、北欧の地域研究者と、新自由主義研究者が、実は同じ方向を向いていたり。いろいろな垣根があっても、ボーダーというの実はなかったりするということで。まあ、無理してボーダースタディーズということで落ちを付けたんですけども。今日は本当に大きなお話をありがとうございました。